NEWS

都市文化研究センター（UCRC）の活動の概要とスタッフ

佐賀　朝（文学研究科教授，UCRC 副所長）

1. 活動の概要

2007 年 4 月，都市文化研究センター（Urban-Culture Research Center，以下，UCRC と略す）が誕生して以来，UCRC では，先端レベルの研究成果を生み出し，大阪市立大学大学院文学研究科を世界最高水準の研究・教育拠点にするための活動を展開してきた。

UCRC は，文学研究科の共同研究の主導とともに，文学研究科に関係する大学院生，若手研究者への高度な教育・研究支援，文学研究科教員への利便性の高い研究支援方策提供などを目的としている。

そのため第一に，大阪市立大学の学内競争的資金である「戦略的研究（萌芽研究・新重点研究）」などに応募し，研究資金を獲得して多角的，機動的な研究活動を行っている。2013 年度は，「戦略的研究」への応募の結果，「新重点研究（B）」2 件と「萌芽研究」2 件が採択された。

さらに，G-COE に準ずる競争的資金である日本学術振興会「頭脳循環を加速する戦略的若手研究者海外派遣プログラム」では，「東アジア都市の歴史的形成と文化創造力」（2011～2013 年度），「EU 域内外におけるトランスローカルな都市ネットワークに基づく合同生活圏の再構築」（2012～2014 年度）に続き，新たな応募にもチャレンジしたが，今回は惜しくも採択をのがした。

大学院生・OD など若手研究者に対する支援事業としては，国際発信力育成インターナショナルスクール（IS）を運営し，国際学会における英語での研究発表，国際学会誌への英文投稿などの技術力養成に努めた。2009 年度末から採用された「組織的な若手研究者等海外派遣プログラム」（ROV）は 2012 年度に終了したが，多数の若手研究者を海外に派遣し大きな成果を上げた。その後継事業として文学研究科では，若手研究者の海外における学会発表や調査への渡航費補助を行う新事業を 2013 年度から実施している。さらに，若手研究者に発表機会を提供するために，雑誌『都市文化研究』と，英文電子ジャーナル『UrbanScope』を引き続き編集・発行している。

また，UCRC ドクター研究員制度を継続し（「表　2013 年度ドクター研究員一覧」参照），学位修得の支援，研究環境の整備に努めた。意欲的な研究員には，ドクター研究員プロジェクトによって研究資金を提供し，科学研究費を申請するためのアドバイスも行っている。企業・財団などによる研究・留学資金提供についても恒常的に情報提供を行っている。なお，IS やドクター研究員制度は文学研究科以外にも門戸を開いており，学内他部局や学外からの参加者も少なくない。

教員への研究支援策としては，科学研究費申請を後援する事業を今年度も実施した。最新の研究成果を市民に還元する事業として，上方文化講座を継続して開催したほか，昨年度未刊行であった文学研究科叢書の編集も進め，年度末の刊行を目ざしている。

2. スタッフ

UCRC の運営にあたる教員スタッフ（コアメンバー）は以下の通りである（順不同）。2013 年度は，事務局体制強化のため，所長・副所長とは別に事務局メンバーを 2 名追加した。

所長：大場茂明教授（地理学）
副所長（事務局長）：佐賀朝（日本史学）
事務局：仁木宏教授（日本史学），佐伯大輔准教授（心理学）
常任研究員：井狩幸男教授（言語応用学），池上知子教授（研究科長，心理学），石田佐恵子教授（社会学），井上徹教授（東洋史学），塚田孝教授（日本史学），山﨑孝史教授（地理学），伊地知紀子准教授（社会学），海老根剛准教授（表現文化学），久堀裕朗准教授（国文学），添田晴雄准教授（教育学），祖田亮次准教授（地理学），滝沢潤准教授（教育学），野村親義准教授（東洋史学），増田聡准教授（アジア都市文化学）山祐嗣教授（心理学）

そのほか，ドクター研究員もスタッフとして研究活動に参加しており，その活動は研究上の履歴ともなる。

●UCRC コア・メンバー会議の開催
第 44 回　2012 年 12 月 7 日
第 45 回　2013 年 1 月 11 日
第 46 回　2013 年 2 月 15 日
第 47 回　2013 年 3 月 19 日
第 48 回　2013 年 4 月 11 日
第 49 回　2013 年 5 月 10 日
第 50 回　2013 年 6 月 14 日
第 51 回　2013 年 7 月 12 日
第 52 回　2013 年 9 月 11 日
第 53 回　2013 年 10 月 11 日
第 54 回　2013 年 11 月 8 日

●UCRC のホームページ
http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/UCRC/

国際発信力育成
インターナショナルスクール

佐伯大輔（文学研究科准教授，常任研究員）

2013 年度のインターナショナルスクールは，文学研究科予算と教育推進本部経費の助成を受け，以下の活動を行った。

1. IS 集中科目

大学院・学部共通科目「国際都市社会論Ⅰ」を 4 日間の日程で開催した。昨年度までは，海外から 3 名の外国人研究者を招聘し，招聘講師による英語での講義，若手研究者による英語での研究発表，招聘講師によるレクチャー・ディスカッション（基礎的内容の講義），前期博士課程の大学院生を対象としたベーシック・プレゼンを 3 日間の日程で実施していたが，開催時期の見直しと学部学生に重点をおいたプログラムに変更したことにより，今年度は，国内の大学から 2 名の外国人講師を招き，英語での講義と受講者どうしのディスカッションを含む集中講義として実施した。日程は以下の通りである。

9 月 20 日（金）・9 月 21 日（土）

講師：Terence Alan Lancashire（大阪大谷大学社会学部教授）

講義：Cultural and Historical Dimensions of Japan Revealed in Japanese Performing Arts

9 月 27 日（金）・9 月 28 日（土）

講師：Hyangjin Lee（立教大学異文化コミュニケーション学部教授）

講義：Cinemas of Three Cities: Tokyo, Osaka and Seoul

2. IS セミナー

昨年度までは，IS 集中科目において海外から招聘した研究者との学術交流を行っていたが，今年度は，IS セミナーを別途実施し，学術交流を行うこととした。開催を予定している 3 件中，2013 年 10 月の時点で，1 件目は実施済みである。

第 1 回 IS セミナー

10 月 23 日（水）13:30 - 17:50

Yuri Taniguchi（Osaka City University）“The possibility that spontaneous trait inference is mediated by spontaneous goal inference regarding observed person's behavior”

Yoshiko Arai（Osaka City University）“Utility and ego- involvement in causal inference”

Paul Wai Ling Lai（Nagoya University）“A non-conventional but effective way of making inference”

Kyung Soo Do（Sungkyunkwan University）“Inductive inference: Category-based induction and causal inference”

3. その他のプログラム

若手研究者を対象に，英語での研究発表の訓練を行う「トレーニングプログラム」を実施した。具体的には，英文原稿作成，プレゼンテーション訓練，質疑応答のリハーサルまで英語による学術発表の基礎的スキルのレッスンを行った。昨年度までは，このプログラムに参加した若手研究者は，IS 集中科目において研究発表を行っていたが，今年度は，IS セミナーで研究発表を行うこととした。また，前期博士課程の授業科目として「アカデミック・コミュニケーション演習Ⅰ（前期）・Ⅱ（後期）」を実施している。

さらに，「外国語論文校閲補助」，「ライティングセミナー」，および「IS 日常化プログラム」（外国研究者による単発レクチャー）を実施している。

頭脳循環を加速する
若手研究者戦略的海外派遣プログラムⅠ

仁木　宏（文学研究科教授，常任研究員）

日本学術振興会が募集した「頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム」に応募し，2011 年，事業名（研究課題）「東アジア都市の歴史的形成と文化創造力」で採択された。

本プログラムは，国際共同研究のネットワークの核となる優れた研究者を育成し，わが国の学術振興をはかることを目的としている。大学の国際研究戦略に沿って，世界水準の国際共同研究に携わる若手研究者を海外へ派遣し，様々な課題に挑戦する機会を提供する取り組みが支援されるものである。

「東アジア都市の歴史的形成と文化創造力」は，2011～2013 年度の三ヶ年のプログラムで，担当研究者は，仁木宏（主担当），井上徹，松浦恆雄，平田茂樹，野崎充彦，塚田孝，佐賀朝，川野英二，伊地知紀子である。この 9 名で，「頭脳循環」アジア運営委員会を構成して

いる。

1. 若手研究者の派遣

若手研究者は，合計 5 名を派遣したが，2012 年度に 2 名，2013 年度に 1 名が帰国し，残る 2 名が 2013 年度末まで協力機関で研鑽を積んでいる。なお，帰国した 3 名のうち 2 名は研究機関に就職した。

2. 国際共同セミナー

①第 5 回　2013 年 2 月 2 日　大阪市立大学都市文化研究センター・釜山大学校韓国民族文化研究所第 3 回共同学術会議「近現代の都市下層―歴史性と現代性」
大阪市立大学高原記念館学友ホール
＜第 1 セッション―都市下層の歴史性＞
司会：佐賀　朝（大阪市立大学）
報告：金慶南（法政大学）「植民都市の開発と地域的・民族的差別構造の形成」，島田克彦　（桃山学院大学）「近代大阪における市街地周辺部の開発過程と労働力の諸形態」，車ユンソン（釜山大学校韓国民族文化研究所）「アミ洞の人びと」，コメント：坂本悠一（元九州国際大学）・本岡拓哉（同志社大学）
＜第 2 セッション―都市下層の現代性＞
司会：川野英二（大阪市立大学）
報告：文ジェウォン（釜山大学校韓国民族文化研究所）「釜山山腹道路についての同床異夢」，田淵貴大（大阪府立成人病センター）「居住地に由来する差別は，メンタルヘルスの社会的決定要因である。」，文鐘聲（太成学院大学）「在日コリアン高齢者と日本人高齢者の比較研究からみた社会格差と健康」，コメント：川本綾（大阪市立大学）・全ウンフィ（大阪市立大学）

②その他　2013 年 7 月 6～7 日　中国人民大学国学院「国際共同会議」に協賛・参加　報告：井上徹（大阪市立大学）「明末的商税征收和广东社会」ほか

3. 個別セミナー

①第 6 回　2012 年 12 月 7 日（第 11 回 関西比較中世都市研究会）　大阪市立大学文化交流センター
報告：塩卓悟（唐宋代食文化史，大阪市立大学，「頭脳循環」被派遣者）「唐宋代の夜市」
コメント：木村容子（イタリア中世史・大阪市立大学）

②第 7 回　2013 年 1 月 26 日（2012 年度第 3 回都市周縁研究会）　大阪市立大学高原記念館学友ホール「大阪が壊れるとき」
報告：宇城輝人（福井県立大学），原口剛（神戸大学），川野英二（大阪市立大学）

③第 8 回　2013 年 2 月 16 日（第 1 回　都市文化研究セミナー・再考「大坂・アジア・都市」）大阪歴史博物館「前近代の大坂」
報告：古市晃（神戸大学）「難波宮と古代国家」，大澤研一（大阪歴史博物館）「宗教都市の時代　中世大阪」

④第 9 回　2013 年 3 月 1 日（第 12 回 関西比較中世都市研究会）大阪市立大学文化交流センター
報告：長谷川恵（ドイツ中世史・ミュンスター大学）「中世後期ドイツにおける都市祭礼の市民化のプロセス　―シュトラースブルク，および日本（京都，堺）における事例の比較分析を通して―」
コメント：河内将芳（日本中世都市史・奈良大学）

⑤第 10 回　2013 年 3 月 9 日（第 2 回　都市文化研究セミナー・再考「大坂・アジア・都市」）大阪歴史博物館「アジア海域世界と中世日本」
報告：榎本渉（国際日本文化研究センター）「中世東シナ海航路を守る神―海域で生成・伝播する航海信仰―」，中島楽章（九州大学）「16 世紀，東アジア海域の変動と日本列島―豊臣政権と福建ネットワーク―」

⑥第 11 回　2013 年 5 月 31 日（第 13 回関西比較中世都市研究会）大阪市立大学文化交流センター
報告：綿貫友子（日本中世流通史・大阪教育大学）「日本中世の湊津支配をめぐって―修築と管理を主に―」
コメント：山崎覚士（中国都市史・佛教大学）

⑦第 12 回　2013 年 7 月 26 日（第 14 回関西比較中世都市研究会）大阪市立大学文化交流センター
報告：嵩井里恵子（西洋史・大阪市立大学）「歓待施設（施療院）からみた中世・近世初期のパリ社会」
コメント：三枝暁子（日本中世史・立命館大学）

⑧第 13 回　2013 年 8 月 2 日（第 15 回関西比較中世都市研究会）大阪市立大学文化交流センター
報告：仁木　宏（日本中世都市史・大阪市立大学）「15・16 世紀京都における「都市文書」―ストラスブール国際シンポの準備報告―」
コメント：山田雅彦（西欧（フランドル）都市史・京都女子大学）

⑨第 14 回　2013 年 9 月 7 日（中国近世近代史研究会）大阪市立大学文学部　中国都市史セミナー「中国周縁の都市を考える」
報告：辻高広（大阪市立大学都市文化研究センター研究員）「清末，江西省の都市発展と釐金徴収」
報告：井上徹（大阪市立大学）「民族反乱鎮圧後の戦後体制と城郭都市―広東羅定州の創設」
コメント：永田拓治（阪南大学専任講師）

⑩第 15 回　2013 年 9 月 21 日　大阪市立大学経済研究所　ミニシンポジウム「前近代中国の都市性をめぐって―宋元時代を中心に―」
報告：平田茂樹（大阪市立大学）「前近代中国の都市性とは？」，高橋弘臣（愛媛大学）「南宋の臨安―行在・宋代の都市・江南の都市としての―」，久保田和男（長野工業高等専門学校）「北宋の開封の都市性」，渡

辺健哉（東北大学）「元の大都の都市性」

⑪第 16 回　2013 年 11 月 10 日（中国都市史セミナー）大阪市立大学経済研究所　共催：中国近世近代史研究会，近世大坂研究会，都市文化研究センター比較都市文化史研究会　報告 1：巫仁恕（中央研究院近代史研究所）「乾隆朝地方物品消費与収蔵的初歩研究：以四川省巴県為例」，コメント：伍躍（大阪経済法科大学），報告 2：梶谷懐（神戸大学大学院経済学研究科）「習近平政権下の都市化（城鎮化）政策―現状と課題―」，コメント：野村親義・上野雅由樹（大阪市立大学文学研究科）

4. データベース

①中国都市史資料データベース「撫粤政略」をアップした。「撫粤政略」は李士楨が広東巡撫在任中に著した各種布告，奏疏，官府間の移動文書などを収録するが，これらの文書のなかには，広東省城を中心として都市行政に関わるものが多く含まれている。「撫粤政略」のうち都市行政に関わりの深い文書を中心として講読を進めた。講読会のメンバーは辻高広（大阪市立大学大学院文学研究科後期博士課程），申斌（大阪市立大学大学院文学研究科前期博士課程），山本一（大阪大学大学院後期博士課程），田由甲（大阪大学大学院後期博士課程），井上徹（大阪市立大学文学研究科）である。講読会では，メンバーがそれぞれ関心のある文書を選んで読解し，発表を行う形式をとった。中国都市史資料データベースには，講読会で取り上げた文書（標点）と語句の説明，文書に関する若干の考察を収録している。
http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/zuno/db/fu_yue_zheng_lue.pdf

②1. 東アジア都市文献データベース，2. 都市大阪に関する歴史学関係文献目録，3. 朝鮮社会都市研究データベース　についても，引き続き構築中である。

③ICPSR 国内利用協議会；参加を登録し活用している。

5. ホームページ

http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/zuno/index.html

各種セミナーなどの催しもの情報，若手派遣報告を掲載。随時更新中

6. 運営委員会

2012 年度　第 7 回　2012 年 11 月 6 日（火）
第 8 回　2012 年 12 月 14 日（金）
第 9 回　2013 年 1 月 18 日（金）
第 10 回 2013 年 2 月 8 日（金）
第 11 回 2013 年 3 月 19 日（火）

2013 年度　第 1 回　2013 年 4 月 26 日（金）
第 2 回　2013 年 5 月 10 日（金）
第 3 回　2013 年 7 月 5 日（金）
第 4 回　2013 年 9 月 12 日（木）
第 5 回　2013 年 10 月 4 日（金）
第 6 回　2013 年 10 月 25 日（金）
第 7 回　2013 年 11 月 15 日（金）

頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラムⅡ

大場茂明（文学研究科教授，UCRC 所長）

日本学術振興会が募集する「頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム」に UCRC を主体として申請し，2012 年度に採択された。共同研究テーマは「EU 域内外におけるトランスローカルな都市ネットワークに基づく合同生活圏の再構築」で，2012 年度～2014 年度の 3 カ年にわたるプログラムである。

担当研究者は，大場茂明（主担当，地理学），大黒俊二（西洋史学），北村昌史（西洋史学），福島祥行（ドイツ語圏フランス語圏言語文化学），海老根剛（表現文化学），草生久嗣（西洋史学）の 6 名で，このメンバーが「頭脳循環（EU TransNet）」プログラム運営委員会を構成する。

共同で事業を実施する相手側の研究機関は，①ドイツ有数の歴史学の拠点の一つであり，地域研究・環境史学においても知られるビーレフェルト大学歴史学科，②現代社会研究の拠点であるフランス国立社会科学研究院，③イタリアの有数の総合大学にして社会史研究に卓越したボローニャ大学歴史・人間文化学部である。

1. 若手研究者の派遣

2012 年度に 2 名，2013 年度に 2 名，計 4 名の若手研究者を派遣した（表「頭脳循環（EU TransNet）海外派遣者一覧」参照）。2014 年度の被派遣者に関しては，ホームページ（「4. ホームページ」参照）上で公募をおこない，計 3 名を派遣予定である。若手研究者は，現地で研究・調査に従事するとともに，滞在市の大学・高等研究機関，公的機関によるセミナー，市民講座ほかの研修に直接参加し，滞在地の専門家あるいは同世代の研究者仲間との共同作業を通じたネットワークを構築すべく研修を行なうことになる。派遣者決定にあたっては，「頭脳循環（EU TransNet）プログラム運営委員会による選考を実施する。

頭脳循環（EU TransNet）海外派遣者一覧（派遣順）

派遣者	派遣者所属	派遣先研究機関	派遣期間	研究テーマ	担当研究者
前田充洋	大阪市立大学大学院文学研究科西洋史学専修後期博士課程	ビーレフェルト大学歴史学科	2012年12月～2013年10月	第二帝政期ドイツにおけるクルップ社の対外活動	北村
木村容子	UCRCドクター研究員	ボローニャ大学歴史・人間文化学部	2013年2月～2014年1月	15世紀イタリアにおける説教作成―フランチェスコ会説教師の日誌を中心に―	大黒
中條健志	UCRCドクター研究員	フランス国立社会科学高等研究院	2013年7月～同年9月、2013年12月～2014年3月、2014年7月～同年9月、2015年1月～同年3月	フランスにおける、移民の歴史化にかんする研究―国立移民歴史館を中心とした、関係諸機関における「移民の歴史」に関する談話資料の収集活動と学術交流―	福島
中谷良	大阪市立大学大学院文学研究科西洋史学専修後期博士課程	ボローニャ大学歴史・人間文化学部	2013年11月～2014年9月	13世紀南イタリアにおける王権と地域権力	大黒

2. 国際共同セミナー

2012 年度に大阪市立大学，2013 年度に相手側研究機関であるボローニャ大学で国際共同セミナーを開催した。プログラムは以下のとおり。

第 1 回「都市の変容：グローバル・ミクロヒストリーの試み」（日時：2013 年 2 月 23 日（土）14 時～18 時，場所：大阪市立大学高原記念館学友ホール）

報告 1：Angelika Epple（ビーレフェルト大学）「Global Microhistory. Towards a History of（Translocal）Relations」

報告 2：Felix Brahm（ビーレフェルト大学）「The World - locally reviewed. Hamburg's Overseas Review in the 1950s」

報告 3：草生久嗣（西洋史学）「Constantinople, A Multiethnic City in the Twelfth Century: the "fading" of Byzantine Petchenges from historical writings」

趣旨説明：大場茂明（主担当，地理学）

司会：海老根剛（表現文化学）

第 2 回「The Translocal Urban Networking in EU Cities in Past and Present」（日時：2013 年 9 月 5 日（木）14 時～18 時，場所：ボローニャ大学歴史・人間文化学部円卓会議室）

報告 1：Maria Giuseppina Muzzarelli（ボローニャ大学）「One More Institution, One Less Collaboration」

報告 2：木村容子（UCRC）「"Routine" Preaching in Late Medieval Italy: A Franciscan Preacher's Diary（1484-1507）」

報告 3：Pietro Delcorno（ナイメーヘン・ラットバウト大学）「Promoting a New Civic Institution: The Life of San Bernardino da Siena and the Hospital of Lodi」

報告 4：大場茂明（主担当，地理学）「Local- and Translocal Networking of Turkish Immigrants in Duisburg, Germany」

司会：大黒俊二（西洋史学）

3. 個別セミナー「合同生活圏研究会」

2012 年度に 2 回，2013 年度に 1 回（2013 年 11 月時点），計 3 回の「合同生活圏研究会」を下記の要領で開催した。

第 1 回「都市の変容―ケルンの歴史と現在―」（日時：2013 年 2 月 9 日（土）14 時～18 時，場所：大阪市立大学文学部会議室）

報告 1：猪刈由紀（上智大学）「都市の変容と歴史家・ケルンの歴史と現在」

報告 2：平松英人（東京大学）「近代都市への変容過程における市民的救貧事業の誕生―19 世紀ケルンを例にとって」

報告 3：猪刈由紀・平松英人（ケルン市歴史文書館支援活動共同呼びかけ人）「ケルン市歴史文書館―倒壊からの復興と市民アーカイブ」

第 2 回「中・近世セルビアとダルマチアにおける都市と農村」（日時：2013 年 3 月 22 日（金）14 時～18 時，場所：大阪市立大学文学部会議室）

報告：唐澤晃一「中・近世セルビアとダルマチアにおける都市と農村」

第 3 回「合同生活圏研究会」セミナー「トランスローカル・ネットワークを見る眼」（日時：2013 年 6 月 30 日（日）14 時～18 時，場所：大阪市立大学文学部会議室）

報告 1：百瀬亮司（名古屋市立大学）「『創られた伝統』

としてのコソヴォ言説：19 世紀から 20 世紀における歴史学を中心に」
報告 2：米岡大輔（日本学術振興会，UCRC）「帝国が交錯する場所：ボスニア史研究の現状と可能性」

4. ホームページ

各種イベントの情報，若手研究者による派遣報告などを掲載（http://ucrc.lit.osaka-cu.ac.jp/zuno/）。

5. 運営委員会

2012 年度（11 月以降）
第 3 回　2012 年 12 月 4 日（火）
第 4 回　2013 年 1 月 8 日（火）
第 5 回　2013 年 1 月 22 日（火）
第 6 回　2013 年 2 月 23 日（土）
第 7 回　2013 年 3 月 22 日（金）

2013 年度（11 月時点）
第 8 回　2013 年 4 月 16 日（火）
第 9 回　2013 年 5 月 22 日（水）
第 10 回　2013 年 6 月 19 日（水）
第 11 回　2013 年 7 月 17 日（水）
第 12 回　2013 年 9 月 24 日（火）
第 13 回　2013 年 10 月 30 日（水）
第 14 回　2013 年 11 月 12 日（火）

国際発信力育成インターナショナルスクール若手研究者等海外派遣プログラム

添田晴雄（文学研究科准教授，常任研究員）

大阪市立大学文学研究科・文学部学術憲章には「人文科学・行動科学の方法や考え方を通して人間，社会，文化，言語の諸事象とそこに内在する普遍性を探究する」，「人間，社会，都市，文化をとりまく今日的課題の解決に貢献し得る人文科学・行動科学の構築をめざす」，「先端的研究成果をグローバルな視野から情報発信できる国際的競争力を備えた最高水準の教育・研究をめざす」といった理念が明記されている。本研究科は，このような理念を実現すべく，従来から，COE，大学院 GP，G-COE を通じて，大学院生，ポスドク，若手教員などを積極的に海外に派遣し，海外におけるフィールドワークや資料収集，国際学会等における発表を奨励するとともに，世界的研究者ネットワークの構築に努めてきた。

こういった背景において，本研究科は，独立行政法人日本学術振興会の研究者海外派遣基金に基づく「組織的な若手研究者等海外派遣プログラム」の「国際発信力育成インターナショナルスクール若手研究者等海外派遣プログラム」に，平成 22 年 3 月 12 日～平成 25 年 3 月 11 日の 3 年間取り組んできた。

本取組みの目的は，若手研究者が派遣を契機として，その後の研究キャリアにおいて，研究成果の海外発信，外国大学の研究者との共同研究，海外研究機関への長期滞在，外国人研究者の招聘などの，国際的な研究交流を積極的に行なうようになること，および，自らが若手研究者を指導する立場に置かれた場合に，国際的研究交流マインドを指導できるようにすることである。

派遣には次の 3 つのカテゴリーがある。

（カテゴリーⅠ）ポスドク以上，2 か月以上（原則として 3 か月未満）
応募資格：43 歳未満の本研究科所属の講師，助教，助手，博士号取得済みの UCRC ドクター研究員。

派遣先で，研究・実験・フィールドワークをおこなうとともに，自らの研究内容の積極的「発信」を試みる。派遣終了後，成果還元のための活動を行う。

（カテゴリーⅡ）大学院生以上，2 か月未満
応募資格：43 歳未満の本研究科所属の講師，助教，助手，UCRC ドクター研究員（博士号既取得者に限らない），本研究科後期・前期博士課程大学院生。

派遣先で，研究・実験・フィールドワークをおこなうとともに，自らの研究内容の積極的「発信」を試みる。派遣終了後，成果還元のための活動を行う。

（カテゴリーⅢ）大学院生以上，1 か月未満
応募資格：43 歳未満の本研究科所属の講師，助教，助手，UCRC ドクター研究員（博士号既取得者に限らない），本研究科後期・前期博士課程大学院生。

派遣先で，学会等での発表をおこなうなど，自らの研究内容の積極的「発信」を試みる。あるいは，文学研究科が認める研究者等資質向上研修に参加する。なお，カテゴリーⅢには，カナダ・ビクトリア大学（UVic）英語センター・プレゼン研修への派遣，アメリカ・イリノイ大学国際コロキアムへの派遣，タイやインドネシアでの国際アカデミックフォーラム等，本研究科が企画運営を行う国際研究会等への派遣が含まれる。

平成 24 年単年度では，カテゴリーⅠとして 3 名（草生久嗣：アメリカ合衆国 60 泊，金城美幸：イスラエル・パレスチナ 89 泊，穴沢彰子：台湾 60 泊），カテゴリーⅡとして 6〔7〕名（〔 〕内は学振の計算方法で複数国派遣を重複して計算している。木戸紗織：ルクセンブルク大公国・スイス連邦 37 泊，信藤博之：イギリス 23 泊，柴亜矢子：ドイツ 37 泊，竹西良子 28 泊，空間美智子：アメリカ合衆国 28 泊，佐藤量：中国 10 泊），カテゴリーⅢとして 8〔8〕名（木村容子：イギリス 5 泊，島﨑未央：シンガポール 4 泊，安達菜穂子：アメリカ合衆国 4

若年研究者等海外派遣プログラム派遣実績

年度	I	II	III	計	IIIのうち UVic	UVic以外 のIII
平成21年度	0名（ 0名）	0名（ 0名）	1名（ 1名）	1名（ 1名）	0名	1名（ 1名）
平成22年度	4名（ 4名）	7名（12名）	21名（21名）	32名（ 37名）	10名	11名（11名）
平成23年度	8名（ 8名）	8名（10名）	36名（40名）	52名（ 58名）	13名	23名（27名）
平成24年度	3名（ 4名）	6名（ 7名）	18名（18名）	27名（ 29名）	10名	8名（ 8名）
計	15名（16名）	21名（29名）	76名（80名）	112名（125名）	33名	43名（47名）

※（　）内の数値は，1 回の渡航で 2 か国以上に滞在した場合の学振の算定方法による人数
※ UVic はビクトリア大学における研究発表のためのプレゼンテーション研修

泊，鈴木文子：アメリカ合衆国 4 泊，石川優：フィンランド 3 泊，河上春香：タイ 3 泊，米岡大輔：アメリカ合衆国 6 泊，有田豊：アメリカ合衆国 6 泊）を派遣した（敬称略，泊数はプログラムにより支給された泊数のみ）。このほか，カナダ・ビクトリア大学英語センター・プレゼン研修には，8 月 25 日〜9 月 9 日，10 名（劉麗，澤村有紗，葛夢，小縣さくら子，芝山寛子，中澤由紀子，長谷部洋子，安達菜穂子，谷口友梨，柴亜矢子）を派遣した。

3 年間の本取り組みの成果は以下のとおりである。

(1) 本事業により，125 名の若手研究者等を海外に派遣できたことが大きな成果である。文学研究科の研究には，現地の人々に対するインタビュー調査やアンケート調査，古文書などゼロックス複写が許可されていない資料の手書きによる筆写など，海外渡航しなければすすめることができない研究分野が少なくなく，国内にとどまった研究ではなしえない研究成果を産出することとなった。

また，被派遣者のほとんどが現地の研究者と交流をもち，該当研究分野の大家と呼ばれる研究者に博士論文などの執筆についての助言を得るとともに，現地の同世代の研究者ともネットワークを構築することができた。さらに，図書館等の司書との研究交流を通じ，新たな資料を発掘することができた被派遣者もいる。

本事業を契機として海外に研究拠点を構築することができた若手研究者等は，その研究を継続していくにあたり，今後も，国際的な研究者ネットワークを駆使しながら，海外におけるフィールド研究，文献研究を続けていくことになると期待される。また，彼らが将来大学等の教育機関に就職して，学生や大学院生に指導を行う際には，自らの海外経験を踏まえて海外での調査・研究，研究発表等を奨励していくことが期待される。

(2) 本事業により，本研究科の研究ネットワークの幅と質が大きく発展したことがあげられる。まず，被派遣国の広域での分布をみると，派遣総人数の 125 人のうち，アジア地域の小計が 37 人と約 3 割を占めていることが指摘できる。また，個々の国では，アメリカ，ヨーロッパ，中国への渡航が多くなっている。これは，国際学会が頻繁に開催されているのがこれらの国であることによる。しかし，学会以外での活動も含めて派遣国を見てみると，中国，台湾はもとより，韓国，タイ，インドネシア，マレーシア，シンガポールといったアジア諸国への渡航が少なからず含まれる。また，イスラエル，パレスチナ，アラブ首長国連邦，ルクセンブルク大公国，ブルガリア共和国，ポーランド，フィンランド，チェコ共和国，など多種多様な国との研究ネットワークが広がっていることがみてとれる。

機関どうしの研究ネットワークについては，イリノイ大学との連携が特筆される。本事業期間中に，本研究科の若手研究者等を派遣することによって，イリノイ大学のキャンパスにおいて国際シンポジウムを 3 回開催することができた。イリノイ大学とは今後も継続して連携をすすめていくことが期待される。

このほか，本研究科はインドネシアのガジャマダ大学，タイのチュラロンコン大学とも連携し，国際シンポジウムをほぼ毎年開催しているが，本事業としては，それぞれ 2 回ずつ若手研究者等を派遣して発表を行わせることができた。

(3) 本事業による派遣が，国際的に発信し続ける研究者として成長するためのキャリア・パスの一環となったことも意義深い。本研究科は平成 19 年度から，当時の大学院教育改革支援プログラムを契機にして，国際的に発信し続ける研究者を養成するための大学院教育を実践してきた。そして，たとえば，アカデミック・コミュニケーション演習（研究成果を英語で発表することを目的とした大学院の正規科目）を履修した者が，本事業のカナダ・ビクトリア大学における研究発表のためのプレゼンテーション研修に参加したり，同研修に参加した者が，本学のインターナショナル・スクール集中科目で英語によるプレゼンテーション発表を行ったり，そのプレゼンテーション科目で発表した者がイリノイ大学に派遣されて国際シンポジウムで発表を行ったり，こういった海外でのシンポジウムで発表した者が英語等で論文を発表したり，といった連続した成長をとげた若手研究者が少なくない。

(4) 海外で調査研究を行ったり，学会発表を行ったりした経験は，被派遣者に役だったばかりではない。本事

業によって派遣された若手研究者には，海外での経験を所属の研究室等においても積極的に話すように奨励してきた。申請書のなかにもその計画を盛り込む指導も行ってきた。そして，125 名という大量の若手研究者が日常的に海外に派遣される姿を見て，後輩の大学院生や学部生が，海外で活躍することが「あたりまえ」と思えるような雰囲気が醸成された。後輩たちは，自分たちも近い将来，少し努力をすれば先輩のように海外で活動できるのだと思うようになっている。将来における彼らの研究者としての国際舞台での活躍が期待される。

(5) 選抜に先立って若手研究者等に申請書を書かせたことによる間接的な教育的効果も見逃せない。申請にあたり，申請者は研究計画の意義や計画の見通しについて詳細に説明することが求められた。申請書の記述内容が不十分な場合は採択をいったん見送り，申請書の書き方を本人に指導してから再申請させるということを頻繁に行った。このことが科学研究費助成等の外部資金の申請書を書くための訓練にもなったと言える。また，このことにより，本事業による海外渡航は税金を原資とする補助金によっているということの自覚を若手研究者等に喚起することができた。

(6) もうひとつの間接的な意義として，教員が専攻を超えて若手研究者等の指導を行ったり，教員と若手研究者が専攻を超えて海外における研究活動のよろこびや困難の克服等について意見交換を行ったりしたことがあげられる。本研究科は，COE や大学院 GP などを，一部の専攻の教育・研究活動とせず，あくまでも機関全体を通した組織的なものと位置付けて実践を行ってきた。本事業では，派遣に先立つ選抜過程や，帰国後の若手研究者等派遣成果報告会等の機会によって，専攻を超えた教育・研究をごく自然に行うことができた。

以上のように，本事業の成果は，派遣された若手研究者にとって大きな成果をもたらしたのみならず，研究者養成を柱としている本研究科の教育・研究活動に意義深い影響を与えた。そして，これらの成果が日本や世界の研究にも還元されていくものと信じている。

なお，本取り組みの詳細情報は，以下の URL で閲覧できる。

http://educa.lit.osaka-cu.ac.jp/~rov/index.html

2012 年度 戦略的研究（萌芽）の活動Ⅰ

塚田　孝（文学研究科教授，常任研究員）

大阪市立大学の戦略的研究経費の一ジャンルつであった都市問題研究は，2012 年度から萌芽研究の枠組みに包摂されることになり，その他のジャンルとともにすべてが再審査されることとなった。2010 年度から 3 ヶ年にわたって認められる予定であった都市問題研究プロジェクト「近世都市大坂の歴史構想と史料テキストの開発」（研究代表：塚田孝）は，幸い 3 年目の継続を萌芽研究として認められた。

本研究は，**近世都市大坂の豊かな歴史像を，具体的な史料の解説を通して提示するテキストの開発**を目的としている。その対象は，学生及び博物館利用者（外国人を含む），さらに広く市民を想定し，**本学での共通教育や博物館の市民向け講座のテキストとして利用する**ことを意図している。

研究代表の塚田のほか，佐賀朝（文学研究科），谷直樹（元生活科学研究科），八木滋（大阪歴史博物館），西本菜穂子（大阪歴史博物館），渡辺祥子（近世流通史），岩本馨（京都工芸繊維大学），ダニエル・ボツマン（イェール大学），ティモシー・エイモス（シンガポール国立大学）が共同研究者として加わり，研究実施体制を組んだ。日常的には，塚田・佐賀・八木が運営事務局を構成し，若手研究者（PD）や院生の協力も得て事業を進めた。

2012 度は，昨年度に作成した『史料から読む近世大坂《試行版Ⅱ》』をテキストとして，共通教育「歴史のなかの大阪」（塚田担当）や大阪歴史博物館古文書講座「史料から読む近世大坂」（2013 年 2〜3 月連続 5 回，担当：八木・塚田・西本・佐賀）で実際に使用し，その改良をはかった。これらの改良点を踏まえてバージョンアップをはかり，将来，出版社からの刊行をめざしたいと考えている。

最終年度である 2012 度の重点課題として，英語版テキストを作成した。『史料から読む近世大坂《試行版Ⅱ》』は「Ⅰ　近世大坂の形成と三郷惣年寄」・「Ⅱ　町（住民生活の基礎単位）」・「Ⅲ　仲間」の 3 部構成で近世大坂の総合的な把握を意図していたが，そのうち近世都市を理解する上で鍵となる「町」に絞って，基本史料の理解を通して大坂の都市社会の基礎を解説する《英語版》として再編集した。塚田・八木が《英語版》のための日本語原稿を作成し，ジョン・ポーター，ミッチェル・マシューが英語への翻訳作業を行い，『Early Modern Osaka from the Documents English edition 史料から読む近世大坂（英語版）』（萌芽研究報告書：八木滋氏と共編，大阪市立大学都市文化研究センター，2013 年 3 月，1-56 頁）を完成させることができた。ここには 2011 年度に開催した国際円座「訳語問題から近世社会を掘り下げる」の経験が活かされている。

これらの成果を海外へ向けて発信を図るべく，研究分担者ティモシー・エイモスの尽力を得て，シンガポール

国立大学でワークショップ「日本史研究と教育訓練における理論と実践」（2013 年 1 月 10・11 日）を共同開催した。ここには日本からは，研究代表者塚田と研究分担者佐賀・八木のほかジョン・ポーター（英語版翻訳担当），島﨑未央（後期博士課程）が参加して，（歴史）教育と史料に関わる報告を行った。そこにおいて『史料から読む近世大坂《英語版》』について英語圏における日本史教育において求められる点やその活用法についても議論することができた。

研究代表者・塚田を編集者として，CCS の大阪都市史特集（*City Culture and Society*（*CCS*）“The Urban Social History of Osaka: A Study Focusing on the Lifeworld of the Urban Masses” 3-1（2012），pp. 1-85.）が発刊されたが，これは大坂・大阪の歴史構想を論文の形で海外発信するものであり，《英語版》と表裏の関係にある。そこで，両者を取り上げ，2 月 16 日（土）に国際小円座「大阪の都市社会史と史料テキストをめぐって」（主催：都市研究プラザ都市論ユニット／近世大坂研究会／萌芽研究「近世都市大坂の歴史構想と史料テキストの開発」）を開催した。そこでは，海外研究者の立場からロバート・ヘリヤー（ウェイクフォレスト大学）とティモシー・エイモス（シンガポール国立大学：研究分担者），および CCS 編集者の立場から堀口朋亨（都市研究プラザ特任講師）の三氏による報告を受け，これらの取組みの成果と今後に向けた改善点などを議論した。

なお，昨年度の取組みではあるが，2012 年 3 月 26〜28 日にアメリカ・イェール大で研究分担者（ダニエル・ボツマン）のプロモートによって，英語圏日本史研究者の参加する特別シンポジウム「City and Region in Japanese History」を開催したことを付記しておきたい。

本研究は，主として学生や市民を想定して，史料から大坂の豊かな都市史像を提示することを目的としているが，英語圏の研究者との討論を通して，史料の分析から帰納的に理論化を図る研究スタイルの持つ意味，言い換えれば，歴史研究における理論と実証について自覚することができた。

以上の研究遂行のため，以下の会議・研究会を行った。

2012 年

（3 月 16 日（金）運営事務局会議（拡大）…前年度の会議）
4 月 11 日（水）運営事務局会議（拡大）
5 月 20 日（日）運営事務局会議（拡大）
7 月 18 日（水）運営事務局会議（拡大）
8 月 3 日（金）《英語版》編集会議
8 月 25 日（土）運営事務局会議（拡大）
9 月 16 日（日）運営事務局会議（拡大）
10 月 31 日（水）運営事務局会議（拡大）
11 月 31 日（水）運営事務局会議（拡大）
12 月 23 日（日）運営事務局会議（拡大）

2013 年

1 月 17 日（木）運営事務局会議（拡大）
1 月 27 日（日）運営事務局会議（拡大）

2012 年度 戦略的研究（萌芽）の活動Ⅱ

中川　眞（文学研究科教授，常任研究員）

本研究の目的は全国の美術館，アートの現場と連携し，キュレーター（学芸員）のギャラリートーク（作品解説）をインターネットで配信する研究プロジェクト「CURATORS TV（以下，CTV と略）」のコンテンツの拡充（量・質的安定化）をはかるとともに，サイトの技術的改良，教育資源のためのアーカイブ制作を行い，最終的には公益性を重視したソーシャル・ビジネスのモデルを創出，その実施を試みることにある。CTV とは，ギャラリートークを撮影した映像を一次資料（リソース）とし，それを大量収集，保存した上で，インターネットを通して配信する教育・研究・娯楽メディアである。アーツマネジメントやアートアドミニストレーション（管理）の研究・教育用の資源としても有効で価値の高いものである。2012 年 4 月 13 日に一般公開を開始した。そのサイトの URL は以下の通りである。

http://curatorstv.com

平成 12 年の時点でコンテンツは 14 と少なく，1 日のアクセス数は 100 件程度であるが，現在は 40 のコンテンツでアクセス数も上昇しているものの，まだ決して多くはない。システマティックな形では世界に存在していない事業であるため，市場サイドから見ても実用化のメドを早くたて，パイオニアプロジェクトとして先駆けていくべく努力しているところである。グローバルスタンダードのサービス産業化を目指しているが，一般の芸術ファンだけではなく，美術館から遠隔に離れている地域，重い疾病などで長期入院を余儀なくされている人々など，アートの享受にかかわるアクセシビリティの低い人々を支援するという意味でも包摂的で重要なプロジェクトであると自負している。

研究は中川によって行われるが，以下のメンバーが連携して協力する（役職名などは 2012 年度）。

＊大阪市立大学メンバー：鈴木大輔（研究補佐），雨森信（特任講師），林朋子（特任助教）

＊外部メンバー：加須屋明子（京都市立芸術大学 准教授），寺浦薫（大阪府都市魅力創造局文化課　主任研究員），洛西一周（Nota Inc. 代表）
＊アドバイザリー・ボード：建畠哲（京都市立芸術大学 学長，埼玉県立近代美術 館長），青柳正規（国立西洋美術館 館長，全国美術館会議 会長）

2012 年度 戦略的研究（若手）の活動 I

木村義成（文学研究科准教授，常任研究員）

＜研究課題＞
地理システムを利用した大阪府における救急搬送アクティビティ評価

＜研究目的＞
現在，医師不足に伴う救急告示病院の指定取り下げや救急医療の需要の高まりにより，患者の搬送時間の長時間化が懸念されている。消防白書では，全国における救急医療機関への平均搬送時間は 31.0 分（平成 17 度）から 37.4 分（平成 22 年度）（総務省，2011）と増加していることが報告されており，長時間の救急搬送が社会問題となっている。本研究では，大阪市内において発生した救急事案を対象とし，救急搬送のアクセシビリティを，救急車が救急現場までに到達するまでの時間と定義し，地理情報システム（GIS: Geographic Information System）を用いて，救急搬送アクセシビリティを評価することを研究目的とした。

＜研究の特色＞
本研究では，本学医学部救急救命センターと大阪市消防局で協力関係を築き，大阪市消防局から平成 22 年，および 23 年に大阪市内で覚知された約 20 万件を越える全ての搬送データを電子地図上にプロットし，アクセシビリティ分析を行った。救急搬送の現状を明らかにし，覚知場所，覚知時間帯，疾患ごとにアクセシビリティの差異を検討し対策を提案することは，今後の救急医療行政に対して重要な基礎的資料を提供できる点で意義がある。

＜研究結果＞
① 平成 23 年における大阪市内における救急覚知
平成 22，および 23 年に大阪市内では，それぞれ 206,185 件，211,238 件の救急覚知が報告された。平成 23 年の搬送内容をみると，救急隊員が搬送医療機関を決定する「傷病者搬送（選択）」と，搬送される患者自身が搬送医療機関を決定する「傷病者搬送（依頼）」の搬送内容が約 75％を占めている。また，事故内容に注目すると，上位 3 つは，急病，一般，交通事故であり，これらが全体の約 90％を占めている。救急覚知場所に注目すると，繁華街を擁する北区や中央区，高齢化が進展する西成区等において救急事象が集中して発生しており，救急需要の地域差が確認された。

② 救急隊～現場到着までの地域的な時間差の検討
重症患者の場合，救急車が出動する救急隊から覚知現場に到着するまでの時間（現着時間）が，生存率や予後の状態に重大な影響を与える。したがって，傷病搬送のみのデータを抽出し，市内において現着時間の地域的な時間差について検討を行った。その結果，市の湾岸，淀川沿岸，市の外延部地域において現着時間が 10 分以上かかる地域が確認された。これらの地域では，現着時間を短縮するために，隣接する自治体との広域搬送体制の確立，新規の救急隊配置，あるいは重症患者の初期対応を補助する AED の配置などの対策が必要であることが示唆された。

③ 新規救急隊配置のシミュレーションによる検討
平成 23 年時点に市内に存在した 50 消防署（救急隊）を供給地点，市内における覚知件数を救急需要とし，救急隊から平均 10 分以内に現着可能な条件のもとで，もう 1 箇所救急隊を配置するならば，どの場所が最適か，立地・配分モデル（最大カバー問題）を用いてシミュレーションを行った。その結果，西淀川区大野 1 丁目付近が，新規救急隊配置場所の候補地として選定された。大阪市では平成 18 年に救急隊の数を 50 隊から 59 隊に，平成 19 年にさらに 1 隊像隊し，現在の 60 隊体制となっているが，大阪市消防局が課題としている救急隊の平均到着時間 5 分体制に向けて，更なる救急隊増設の検討が必要である。

＜今後の研究への展開＞
本研究の成果は，平成 25 年 4 月 23 日に本学の学術戦略会議で発表を行った。また，平成 25 年 11 月 9 日，および 10 日に開催された人文地理学会にて，本研究内容をポスター発表した。
本研究の結果をふまえて，②の所見で明らかになった救急隊の現場到着時間が一定以上必要な地区において AED の配置が有効かどうかを検討するために平成 26 年度の科学研究費に申請を行った（2013 年度の項参照）。

2012 年度 戦略的研究（若手）の活動Ⅱ

佐伯大輔（文学研究科准教授，常任研究員）

本研究プロジェクトは，「都市生活者の心理学的特性に関する実証的研究―都市生活環境尺度の開発―」として平成 24 年度戦略的研究経費（若手研究）に応募し採択されたものである。プロジェクトの進行にあたっては，池上知子（大学院文学研究科・教授），宮崎弦太（立教大学現代心理学部・助教），矢田尚也（大学院文学研究科・UCRC ドクター研究員）の協力を仰いだ。生活環境がどの程度「都市的」であるかは，そこに住む人々に対して様々な影響を与える。従って，生活環境の都市化の程度（都市度）を把握することは，生活者の心的状態や行動パターンを理解するために重要である。しかしながら先行研究では，都市度は，人口規模といった比較的大まかな指標で表されてきた。そこで本研究では，生活環境の都市度を，複数の次元からなるものと想定し，各次元における都市度を定量的に示すことのできる「都市生活環境尺度」を作成することを目的とした。次に，この尺度によって測定される都市度といくつかの心理尺度との関係を調べることにより，都市生活者の心理学的特徴を明らかにすることを試みた。

「都市生活環境尺度」の項目確定のための予備調査（大学生 41 名を対象）と本調査（大学生 215 名を対象）の結果，31 項目からなる「都市生活環境尺度」が作成された。因子分析の結果，「交通の利便性」「施設の充実」「生活の快適さ」「自然の乏しさ」「活気」「刺激の量」「通信インフラの整備」「買い物の利便性」という 8 因子にまとめられた。

「都市生活環境尺度」の尺度得点と，他の心理尺度との関係を調べた結果，「生活の快適さ」が関係流動性（新たな対人関係を築く機会の数）に，「買い物の利便性」が自尊心に，「交通の利便性」と「活気」が主観的幸福感に対して正の影響をもつこと等が明らかになった。本研究では大学生を調査対象としたため，結果を他の年齢層や同じ年齢層の社会人に一般化可能かどうかを確認する必要があるが，本研究の結果は，都市的生活環境の次元によって，影響を受ける心理的側面が異なることを示しており，都市生活者の心理学的特徴を把握するには，都市度の多面的な測定が必要であることを表している。

2013 年度 戦略的研究　新重点研究（B）の活動Ⅰ

石田佐恵子（文学研究科教授，常任研究員）

【研究課題】

都市・大阪に関する文化資源・社会調査データアーカイブの構築
―二次分析を通じた新たな研究主題の創出―

【研究組織】

石田佐恵子（研究代表者・文学研究科）
A 班　文化資源担当　池上知子・佐賀朝・伊地知紀子・笹島秀晃（文学研究科）
B 班　社会調査アーカイブ担当　進藤雄三・川野英二（文学研究科）・福原宏幸（経済学研究科）・福島若葉（医学研究科）
データベース構築担当　村上晴美（創造都市研究科）

【協力・共同研究体制】

大阪新美術館建設準備室　大阪市経済戦略局文化部
研究主幹　菅谷富夫
財団法人大阪社会運動協会　大阪産業労働資料館
館長　谷合佳代子

【研究目的】

本研究の目的は，これまで収集・実施されてきた，都市・大阪に関する文化資源，社会調査，研究資料，研究成果の統合的データアーカイブを作り上げ，二次分析を通じて新たな研究主題を創出し，アーカイブ公開を通して公共の財産として広く社会に還元することである。
（A 班）文化資源担当：旧萬年社所蔵資料／エル・ライブラリー収蔵資料などを扱う。
（B 班）社会調査アーカイブ担当：社会調査データベースの整備を行う。統合的データベース構築については，村上晴美から専門的な助言を受ける。

【研究経費】2013 年度　150 万円 採択（単年度・継続可）

【研究プロジェクト・サイトの公開（2013/11）】

「都市・大阪に関する文化資源・社会調査データアーカイブの構築」
http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/soc/i_juten2013/

【連続セミナーの開催（予定）】

UCRC と共同で，各種データベースの利用案内セミナーを開催する予定。

2013年度 戦略的研究　新重点研究（B）の活動Ⅱ

仁木　宏（文学研究科教授，常任研究員）

「豊臣大坂城・城下町の総合的研究―「落城」400周年，文理融合・博学連携プロジェクト―」を，2013～14年度の2ヶ年のプロジェクトとして申請し，採択された。

構成メンバーには，研究代表者である仁木のほか，学内外から11名に参加いただいている。

【目的・手法】

2015年，豊臣大坂城は1615（慶長20＝元和元）年の落城から400周年となる。この節目の年を迎えるにあたって，都市大阪の出発点である豊臣大坂城・城下町について総合的研究を行い，その実態を詳細に分析するとともに，豊臣大坂の世界史的意義を解明する。

A　大坂城エリア（本丸・二の丸など）を対象に文理融合研究を行い，地中レーダ探査，地中ボーリング調査成果の分析，石垣のレーザー測量などをおこなう。

B　豊臣大坂城下町は，(1) 上町台地上の平野町，(2) 上町・船場，(3) 大川北岸の天満の3地区からなった。大坂城の南側・西側に展開していた家臣団屋敷地の比定についてはほとんど研究が進んでいない。本研究では，文献史料，絵画史料によって城下町を立体的に復元する。

C　16世紀は東アジアに限らず，世界的に激動の時代であった。東洋と西洋が密接にむすばれた大航海時代にあたり，グローバル化の端緒がうかがえる時期に当たる。この同じ16世紀の都市のうち，明の大都（北京），オスマン帝国のイスタンブール（コンスタンチノープル），イタリアのローマなどと比較研究することで，豊臣大坂の世界史的な意義の解明を目指す。

D　文献史料，絵図・地図などを用いた研究と，レーザー探査，ボーリングコア分析などをあわせて行うことで大坂城・城下町の構造を解明しようとする文理融合型研究である。

また本研究は，公益財団法人大阪市博物館協会に属する博物館施設（大阪歴史博物館，大阪城天守閣など）の学芸員（館長）と共同研究を行う博学連携プロジェクトである。

【経過】

①大坂城下町研究会（会場：大阪歴史博物館）

第1回　6月18日　豆谷浩之（大阪歴史博物館）「松尾信裕氏の大坂城下町論をめぐって」

第2回　7月24日　谷﨑仁美（大阪文化財研究所）「国立病院敷地内発掘調査（NW12-4次調査）における豊臣期の遺構について」

第3回　8月21日　大澤研一（大阪歴史博物館）「豊臣期城下町の大名屋敷―再検討作業の中間報告―」

第4回　10月9日　仁木　宏（大阪市立大学）「豊臣期大坂城下町研究のあゆみ」

第5回　10月22日　松尾信裕（大阪城天守閣）「近世城下町大坂の誕生と拡大」

②三田村宗樹（理学研究科教授）が，大阪城本丸地区のボーリングコア資料の分析をおこなった。

【今後の予定】

①大阪城エリアの文理融合研究については，2014年3月，市民向けのシンポジウムを開催する。

②豊臣期大坂城下町研究。2014年度にシンポジウムを開催する準備を進めている。

③16世紀都市の比較史研究。関西比較中世都市研究会の例会として研究を進める。頭脳循環アジア（代表；仁木）の総括シンポジウム「東アジア都市における集団とネットワーク―伝統都市から近現代都市への文化的転回―」（12月6・7日，学術情報総合センター）においても，本研究の成果をいかした報告をおこなう。

2013年度 戦略的研究　新重点研究（B）の活動Ⅲ

川邉光一（文学研究科准教授，常任研究員）

本研究プロジェクトは都市問題の一つであるストレスと精神疾患の関係に着目し，統合失調症モデルラットや老化促進マウスのような疾患モデル動物のストレス脆弱性を，精神疾患と関連した行動指標を用いて評価することを目指したものである。また，この目的に関連した予備的研究を実施し，上記の目的を達成する上で必要な基礎的な知見を得ることも目的としている。現在までのところすべての実験が実施途上であるため，ここではこれまでの実施状況と今後の計画について述べるにとどめる。

研究課題名：疾患モデル動物のストレス脆弱性に関する行動科学的研究

研究代表者：川邉光一

分担研究者：小島明子（生活科学研究科），佐伯大輔（文学研究科）

研究期間：2013年度（1年間）

(1) 統合失調症モデルラットのストレス脆弱性の評価

統合失調症モデル動物の一つと考えられている新生仔期 NMDA 受容体拮抗薬（MK-801）反復投与ラットについて，ストレス脆弱性の評価を行っている。これらのラットの成育後に 20 日間の強制水泳ストレスを負荷した後，行動テストとして感覚運動ゲーティングの指標であるプレパルス抑制テスト，作業記憶の指標である自発的交替課題，陰性症状の指標である強制水泳テスト，一般活動性を評価するオープンフィールドテストを実施している。また，ストレスホルモンの一種であるコルチコステロンをラットに慢性投与し，同様の行動指標を用いてその効果を調べている。この実験の結果をふまえて，将来的にはストレス負荷と同様に統合失調症モデル動物がコルチコステロンに対し脆弱性を有するかどうかを調べることを目指している。

(2) 老化促進マウスの行動・認知機能の評価

老化促進マウスのストレス脆弱性評価を実施するための予備的な実験として，老化促進マウスの行動・認知機能を Morris 水迷路課題による空間記憶，自発的交替反応による作業記憶などにより評価する予定である。

(3) 精神疾患モデルラットの行動・認知機能異常の評価を行うための新たな行動課題の開発・評価

ラットにおいて，能動的な忘却機能である指示性忘却が生じるかどうかを go/no-go 課題を用いて調べている。さらに，統合失調症や気分障害など多くの精神疾患において異常が起こるとされ，意思決定や思考，人格などの高次認知機能に関わるとされる前頭前野を損傷した時に，指示性忘却にどのような変化が起こるかを調べる予定である。同時に，ラットの虚連合記憶を測定しうる課題の開発を目指している。この現象は，全く無関係な事象を結びつけ，本来存在しない記憶を形成するというものである。ここではこの現象を統合失調症などで生じる妄想の認知的基盤の一つと考え，将来的に統合失調症モデル動物の認知機能の評価に用いることを目指している。

2013 年度 戦略的研究（萌芽）の活動 I

中川　眞（文学研究科教授，常任研究員）

2012 年度から戦略的研究に採択された本事業（2012 年度の項参照）は，2013 年度に大きな展開を遂げた。すなわち大阪市立大学内の研究プロジェクトから，一般社団法人設立へと駒を進めたのである。新産業創生事業として出発したアイデアがようやく孵化したわけである。新法人の代表は中川が務め，名称を World Art Dialogue というふうに定めた。

CTV を核の事業としながら，MoPA（Museum of Public Arts）などのネット事業を展開している。本重点研究においては，引き続きコンテンツを制作，収集，配信し，海外の美術館などとの連携や多言語化に向けたシステム構築の検討を行っているところである。

2013 年度 戦略的研究（萌芽）の活動 II

木村義成（文学研究科准教授，常任研究員）

2012 年度の戦略的研究の結果をふまえて（詳細は 2012 年度の項を参照），そこで明らかになった救急隊の現場到着時間が一定以上必要な地区において AED の配置が有効かどうかを検討するために平成 26 年度の科学研究費に申請を行い，採択された。

2013 年 10 月現在，大阪府の AED を管理している NPO 法人大阪ライフサポート協会から平成 25 年 10 月 1 日時点に大阪市内に配置されている約 2600 件の AED 設置場所に関するデータの提供を受け，このデータをマップにプロットし，大阪市消防局から提供を受けた重症患者と AED 設置場所との関連性を分析している。

今後も，大阪市におけるより良い救急医療体制構築にむけて，本学医学部救急救命センターと大阪市消防局との共同研究を引き続き実施する予定である。

2013 年度 戦略的研究（萌芽）の活動 III

笹島秀晃（文学研究科講師，常任研究員）

本研究は，アメリカのアーカイブにおける史料収集と SoHo 地区における現地調査が中心となるが，採択後渡米できていないため現時点での研究上の大きな進展はない。しかし，先行研究の整理や，今後の史料収集と調査に向けた準備など，ある程度の達成はあった。重点研究採択後，現在までの研究経過の概略は次の通りである。

［2013 年 8 月～9 月］：①先行研究の整理。特に，SoHo 地区の空間変動に関する主要な先行研究（Sharon Zukin,

Charles Sampson, James Hudson）を改めて読み直し，その達成と課題を確認した。②１次資料の整理と分析。具体的には，昨年収集したSoHo Artists Association関連の書簡・マニフェスト・雑誌記事など。③2012年に調査したインタビューの文字起こし。1970年初頭以降SoHo地区に居住している芸術家，及び1970年代当時のニューヨーク市都市計画局の職員の二つのインタビュー。

［2013年10月］：①研究会報告：東北大学社会学研究会例会にて（10月5日）。題目は「ニューヨーク市SoHo地区における芸術家街の形成と都市空間の変動」。
②史料リストのチェック。来年１月の北米での史料収集に向けて，各アーカイブの史料リストを確認し，研究に有用と思われるものを大まかに整理した。特に，“Gordon Matta-Clark Archive”（Canadian Centre of Architecture），” Park Place, The Gallery of Art Research, Inc., and Paula Cooper Gallery records, 1961-2006”・“Holly Solomon Gallery records, circa 1948-2003”，“Tanager Gallery records, 1952-1979”（すべてArchive of American Art）に注目した。

アーカイブス事業　（萬年社コレクションの整理調査）

石田佐恵子（文学研究科教授，常任研究員）

2008年に開始された萬年社調査研究プロジェクトは，旧萬年社所蔵資料（図書類，引札類，ビデオテープ類，紙・文書・印刷資料類）のうち，紙・文書・印刷資料，ビデオテープ類の調査整理を行ってきた。これまでの整理作業によって，以下の表の資料総数が明らかになった。2013年度には，これまで未整理であった古ポスター類約200点，1990年代ポスター1335点，雑誌類約100件の資料の存在が明らかになり，それらの資料整理を行うとともに，ウェブ・データベースに編入，2013年度末にはいよいよ最終的な完成を目指している。

萬年社コレクション　紙・印刷資料／ビデオテープ類概要

大分類	中分類	箱数（資料点数）
萬年社の収集物	大型古資料	152箱（9441点）
内部資料	社史	21箱（610点）
実務資料	企業別ファイル	24箱（204冊）
	イベント資料	11箱（312点）
	広告作品	2箱（57点）
	営業活動	12箱（364点）
ビデオテープ類	映像・音（CM）	204箱（約3万点）
ポスター類（新規）	古ポスター／1990年代	200点／1335点

研究資金としては，吉田秀雄記念財団研究助成金（2009-2010年度），外部研究寄付金（㈱毎日エス・ピー・シー）（2010-2011年度），科学研究費補助金（データベース作成事業：京都精華大学との共同研究）（2010・2011年度），公益信託高橋信三記念放送文化振興基金（2010・2011年度），大阪市立大学都市問題研究（2011年度），大阪市立大学新産業創生研究（2011年度）を獲得してきた。2012年度からは，科学研究費補助金（基盤B（代表：石田佐恵子，2012-2015年度），基盤C（代表：竹内幸絵，2012-2015年度））を獲得して現在も継続中である。

本研究は，今後，他の研究プロジェクト（大阪に焦点をあてた広告史研究，テレビCMアーカイブ構築，日本のテレビ文化史と広告史を接続する試み，本学新重点研究Bなど）との接合により，より発展的な研究展開を目指す段階に至っている。

上方文化講座2013〈壇浦兜軍記〉

久堀裕朗（文学研究科准教授，常任研究員）

講座開設10周年を迎える2013年度の上方文化講座では，華やかな人気作品『壇浦兜軍記』（阿古屋琴責の段）に取り組んだ。

今年も学外非常勤講師として，竹本津駒大夫，鶴澤清介，桐竹勘十郎の三師を迎えるとともに，10周年記念講座として，ゲストスピーカーに望月太明藏・望月太明十郎師（囃子）やお茶の水女子大学の神田由築氏（日本近世史）を迎え，文学研究科教員とともに，8月28日から30日までの3日間（連日9:30～16:00），大阪市立大学学術情報総合センター大会議室を会場にして，人形浄瑠璃文楽やその周辺，そして『壇浦兜軍記』の魅力を多角的に分析する授業を展開した。

応募者多数の中から抽選で選ばれた一般市民約180名と，学生約40名が受講。床・手摺・背景など，特設の大道具を設置した最終日の実演は大いに盛り上がった。授業内容は以下の通り。

8月28日（水）
Ⅰ　浄瑠璃作者文耕堂（久堀裕朗・大阪市立大学）
Ⅱ　『壇浦兜軍記』解説（久堀裕朗）
Ⅲ　伝承世界の畠山重忠（小林直樹・大阪市立大学）
Ⅳ　文楽の囃子について（望月太明藏・望月太明十郎）
8月29日（木）
Ⅰ　『壇浦兜軍記』〔阿古屋琴責の段〕講読（久堀裕朗）
Ⅱ　失・空・斬（松浦恆雄・大阪市立大学）

Ⅲ　『壇浦兜軍記』―― 太夫・三味線の芸（竹本津駒大夫・鶴澤清介）
Ⅳ　『壇浦兜軍記』―― 太夫・三味線・人形の芸（竹本津駒大夫・鶴澤清介・桐竹勘十郎）
8 月 30 日（金）
Ⅰ　大坂の因講と浄瑠璃文化ⅰ（神田由築・お茶の水女子大学）
Ⅱ　大坂の因講と浄瑠璃文化ⅱ（神田由築）
Ⅲ　桐竹勘十郎師に聞く ―― 実演をまじえて（桐竹勘十郎）
Ⅳ　文楽の至芸 ―― 太夫・三味線・人形，三業一体の舞台（竹本津駒大夫・鶴澤清介・桐竹勘十郎）

『都市文化研究』編集委員会

久堀裕朗（文学研究科准教授，常任研究員）

①2013 年度委員
川野英二（文学研究科准教授，社会学）
久堀裕朗（文学研究科准教授，国語国文学，編集委員長）
佐賀朝（文学研究科教授，日本史学，16 号編集主任）
祖田亮次（文学研究科准教授，地理学）
滝沢潤（文学研究科准教授，教育学）
長谷川健一（文学研究科講師，ドイツ語フランス語圏言語文化学）
平田茂樹（文学研究科教授，東洋史学）
イアン・リチャーズ（文学研究科准教授，英語英米文学）
②昨年度からの変更
・編集主任　川野英二（2012 年度）→佐賀朝（2013 年度）

電子ジャーナル UrbanScope 編集委員会

山　祐嗣（文学研究科教授，常任研究員）

UrbanScope は，1 年に 1 号を毎年ウェブ上で刊行しており，2013 年には第 4 号を刊行することができた。同号には，2 本の翻訳および 1 本の投稿論文が掲載された。1 号から 4 号までの総計は，翻訳 8 本，論説 1 本，論文 1 本，ノート 1 本である。2011 年より国外の研究者による査読を実施し，国際的査読体制の確立に努めている。2013 年 10 月 28 日現在で世界 36 の国と地域（245 都市）から約 2800 回のアクセス，約 4300 回の論文ダウンロードが確認されている。このうち 80％以上が国内からのアクセスであるが，米国を筆頭に英国，タイ，ドイツ，オーストラリア，インドネシア，フランス，中国，香港が続く。2013 年前期は 26 年 5 月刊行予定の第 5 号に向けて投稿論文の募集を行った。1 本の投稿があり，現在審査中である。また，5 号に採録予定の 2 本の日本語論文が現在英訳されている。

科学研究費申請を支援する事業

滝沢　潤（文学研究科准教授，常任研究員）

UCRC ドクター研究員や文学研究科教員の若手研究者を主対象とした研究条件の向上策の一環として，今年度も科学研究費補助金申請対策講座を実施した。今年度は，下記の日程で，採択経験者の教員 2 名による講座を開催した。いずれの講座も盛会となり，講師の申請・採択経験を踏まえた申請者書作成のポイントや研究の進め方などについて，丁寧かつ貴重な情報・資料，アドバイスをいただき，大変有意義な機会となった。
岸本直文氏　10 月 4 日（金）16:20〜17:50
（文学部棟 1 階 142 教室）
山祐嗣氏　10 月 8 日（火）16:20〜17:50
（文学部棟 1 階 142 教室）

文学研究科叢書 編集委員会

塚田　孝（文学研究科教授，常任研究員）

2012 年度は，文学研究科叢書が刊行されなかったが，2013 年度は，UCRC とも連携した科学研究費補助研究「近世大坂の「法と社会」―身分的周縁の比較類型論にむけて―」（研究代表：塚田）の研究成果をベースに編集を行うこととなった。編集委員会は，塚田孝，佐賀朝（文学研究科教授，常任研究員）の 2 名で構成し，叢書そのものの編集には八木滋（大阪歴史博物館学芸員）も加わった。
研究科の承認を得た後，6 月に研究科叢書の刊行元である清文堂出版（前田氏）と今年度の叢書刊行について打ち合わせ，これまでの刊行条件（発行部数，研究科からの助成）を踏襲することを確認した（なお，今年度の

刊行助成は大阪市立大学文学部「文学会」からの支出を研究科として確認)。

この科研プロジェクトの日常的な基盤として近世大坂研究会を組織しているが，今回の叢書は，近世大坂研究会が主催し，UCRC および都市研究プラザも共催として開催された二つのシンポジウムにおける報告内容を核として構成された。二つのシンポとは，2012 年 12 月 1・2 日開催の国際円座「近世における貧困と救済」と 2013 年 8 月 24・25 日開催の総括円座「近世身分社会の比較史―法と社会の視点から―」である。具体的には，前者におけるイタリアおよび日本近世史関係の研究報告を中核とした「貧困と救済の比較史」に関わる諸論稿，後者における二つのセッションをふまえた「商人と職人，生産と流通」「大坂の周縁，開発と地域」に関する諸論稿で構成し，これに中国史や近現代史にもまたがる形で問題を整理し論じた研究分担者や編者による「比較・方法・研究史」をめぐるノートも加えた。全体として，比較史にもわたる形で，日本近世身分社会の構造と社会集団の存在形態を，「法と社会」の視点から論じる総合的な論文集とすることができた。

全体は 4 部構成に編成したが，全体で，論文 11 本と，シードノート（今後，本格的な研究の発展が可能な素材や史料のノート的な検討論文）・コメント・解説など 5 本，編者らによる問題提起・整理ノート 4 本を収載予定である。

なお，これらの収載論稿は，9 月末を提出期限として，編者による査読を実施し，必要な修正・補足を経たものである。

以上の編集を進めるにあたり，以下の会議等を開催した。

2013 年

4 月 21 日（日）編集委員会
6 月 9 日（日）編集委員会
7 月 3 日（水）編集委員会
8 月 25 日（日）編集委員会
9 月 15 日（日）編集委員会
10 月 22 日・25 日 27 日・28 日 原稿の検討会
11 月 3 日・5 日・7 日・11 日・12 日 原稿の検討会
11 月 13 日（水）編集委員会，第 1 次入稿

文学研究科 研究茶話会の取り組み

増田　聡（文学研究科准教授，常任研究員）

文学研究科では，かねてからドクター研究員や大学院生より，他専修の教員や院生を交えた研究交流の場が欲しい，との要望があった。これを受け，都市文化研究センターが主催する専修の枠を越えた文学研究科構成員の交流と，共同研究のシーズ開発を目的とする定例研究会の必要性が認識され，平成 23 年度の重点研究 B（新規）として申請し採択され，平成 23 年 9 月より「文学研究科・研究カフェ」を開始した（平成 24 年 4 月から「文学研究科・研究茶話会」に改称)。平成 24 年度以降は本研究課題の継続申請が却下されたため，定例研究会のみを不定期に開催することとなった。平成 24 年 10 月～平成 25 年 10 月の期間，定例研究会は以下の内容で行われた。

第 12 回研究茶話会　日時：2012 年 11 月 30 日（金）
16:30～19:00　場所：文学部棟 2F　情報編集室
竹内玄信（経済学研究科 M2）
「日本のプロオーケストラの演目統計に見られるベキ乗則」
多和田裕司（アジア都市文化学教員）
「「イスラームを売る」ことをめぐって：マレーシアにおける「イスラーム化（脱世俗化)」再考」

第 13 回研究茶話会　日時：2013 年 3 月 26 日（火）
16:00～18:30　場所：文学部棟 2F　情報編集室
油田樹（哲学 M2)「ベルクソンにおける時間論」
増田聡（アジア都市文化学教員）
「「どこまで似ていると「パクリ」なのか」という偽の問いについて：音楽の剽窃を文化研究する」

第 14 回研究茶話会日時：2013 年 5 月 31 日（金）
16:30～18:00　場所：文学部棟 2F　情報編集室
川端美都子（インディアナ大学民族音楽学学科 Ph.D 候補／助教）
「アカデミック・ヴォケーションと大学院教育・制度：アメリカ合衆国における例を通して考える日本の民族音楽学の未来」

ドクター研究員による研究プロジェクト

佐賀　朝（文学研究科教授，副所長）

UCRC では，すべてのドクター研究員に研究費を支給するのではなく，研究員が単独で，あるいは他の研究員や院生・学生と共同で企画・実践するプロジェクトに対して資金援助を行う形で若手研究者の研究支援を行っている。

2012 年度は，下表の 5 件を採択した。文学研究科の科長裁量経費などから支援を得て，各プロジェクトに対

して 100,000 円を上限として支給した（上限を越える部分は自己負担）。

それぞれの研究プロジェクトは，ドクター研究員が研究代表者となり，他のドクター研究員や院生・学生を研究協力者とすることができる。予算申請の都合上，担当教員を配置しているが，プロジェクトの企画と遂行はあくまでドクター研究員自身によるものである。

各プロジェクトの詳しい内容と成果については，後掲の「2012 年度ドクター研究員プロジェクト成果報告」を参照されたい。

2013 年度は，5 件のプロジェクト募集に対して 6 件の応募があったが，審査の結果，6 件に隔絶した差は認められないことから，下表の 6 件をすべて採択し，審査結果の得点に基づいて補助額の調整を行った。

各プロジェクトの詳しい中間報告については，後掲の「2013 年度ドクター研究員プロジェクト中間報告」を参照されたい。

2012 年度　ドクター研究員プロジェクト一覧

No.	テーマ	ドクター研究員	指導教員
1	中世イタリア都市における政治と司法の動態的研究	中谷　惣★	大黒俊二
2	モノとしてのポピュラー文化―展示イベントにおける記号・物質・記憶―	松井広志★	石田佐恵子
3	心身の不調への対処行動の実態解明に向けた調査研究	佐々木洋子★	進藤雄三
4	ルクセンブルク学研究会	木戸紗織★	神竹道士
5	ポピュラーカルチャー研究の領域横断的な方法論の検討―「やおい/ボーイズラブ」を対象に―	石川　優★	三上雅子

注）★マークが研究代表者。テーマはいずれも採用当初のもの。

2013 年度　ドクター研究員プロジェクト一覧

No.	テーマ	ドクター研究員	指導教員
1	1950年代ガーナのアシャンティ州における中高等教育と首長制社会	桑島　穏★	大黒俊二
2	萬年社コレクションの資料を使った関西の広告史に関する調査研究	中嶋晋平★ 竹内幸絵	石田佐恵子
3	新しいモビリティとモビリティ論の時代のメディア研究と映像社会学	小牧龍太★	石田佐恵子
4	ルクセンブルク学研究会	木戸紗織★	神竹道士
5	ポピュラー文化研究における実践と研究の架橋―「やおい/ボーイズラブ」を対象として―	石川　優★	三上雅子
6	その歌声は誰のものか―“VocaListener”を用いた歌唱表現に関する研究―	柴台弘毅★ 岡田正樹	増田　聡

注）★マークが研究代表者。テーマはいずれも採用当初のもの。

2012 年度ドクター研究員プロジェクト成果報告

1. 中谷惣「中世イタリア都市における政治と司法の動態的研究」

(1) 調査の概要

本プロジェクトの目的は，中世後期のトスカーナの都市ルッカにおける政治と司法との関係を，議会議事録に基づいて明らかにすることであった。そのために，1370 年から 1375 年の間の議会議事録の刊本 *Riformagioni della Repubblica di Lucca*, vol. I, II, IV, a cura di A. Romiti e G. Tori, Roma, 1980-85 を入手した。これは我が国では入手不可能なものであり，現地の書店から入手した。ちなみに第三巻はいまだに刊行されていない。これを基に 14 世紀の都市の議会で何を議論し，どのような手続きによって政治的決定が行われていたのかを分析した。

その後，1376 年以降の議会議事録の検討を行うため，ルッカ国立文書館で 2013 年 1 月 28 日より 2 月 28 日まで，史料調査を実施した。1376 年から 1400 年の未刊行の議事録を分析し，写真データの形で持ち帰り，検討を進めた。

(2) 成果の公表

調査の結果は，以下の論文と口頭発表により公表した。

・論文

So Nakaya, “The gratia and the expansion of politics in fourteenth-century Lucca”, in Essays in Honour of Dr M. E. Bratchel, Johannesburg, in press.（論文提出済み，2013 年度刊行予定）

・口頭発表

中谷惣「中世イタリア都市における契約と裁判」（「裁判からみた『新しい世界史』の試み」研究会（科学研究費補助金（基盤研究 S）「ユーラシアの近代と新しい世界史叙述」，東京大学，2012 年 10 月 8 日）

中谷惣「中世後期イタリアの司法と政治―自由裁量，恩赦，例外」（関西中世史研究会，京都大学，10 月 27 日）

(3) 成果と課題

議会議事録の検討により，政治機関が司法府の判決に変更を加える恩赦をたびたび行っていたこと，また時と場合を限定して議会が裁判官に実定法から逸脱する「許可」を与え，例外的な司法を行わせていたことが明らかになった。これらの政策は 14，15 世紀のイタリアの各

都市で観察されている「政治」の拡大のひとつに位置づけることができる。この内容は上記の英語論文で間もなく公表される。

今後は15世紀にも視野を広げ，中世から近世の移行期における政治と司法との関係を考察していきたい。

2. 松井広志「モノとしてのポピュラー文化 ―― 展示イベントにおける記号・物質・記憶」

(1) 研究目的

本プロジェクトは，展示イベントを具体的なフィールドとして，「モノとしてのポピュラー文化」の社会的意味について捉えることを目的とする。

キャラクターグッズやフィギュア，模型などについては，一般的にはコンテンツ産業のひとつとして語られることがほとんどである。また学術的な議論においても，アニメやマンガ，映画などのヴィジュアル文化を中心とする発想では，キャラクターグッズやフィギュアは，視覚的コンテンツから派生した二次的生産物として扱われることが多かった。

それに対し，本研究では，「モノ」に照準する枠組を援用することで，より総合的にキャラクターグッズやフィギュア，模型といった「モノとしてのポピュラー文化」をめぐる受容の諸相を捉えることを目指す。

そのため，従来のメディア文化研究で主流であった，情報内容としてのコンテンツに着目する記号論的な視点に加えて，物質性や集合的記憶といった方向からも分析を行っていく。

(2) 調査内容

調査対象としては，数多くのポピュラー文化関連の展示会のなかでも「モノ」に注目したものを選んだ。具体的には，日本最大級のキャラクターグッズや模型，フィギュアなどの「ホビー」の展示会である「キャラホビ2012 C3×HOBBY」（2012年8月25-26日，於：幕張メッセ国際展示場）を調査対象に設定した。そこでは，送り手（主催・後援する官公庁と企業の関係者）と受け手（当日の展示会への来場者）に対する半構造化式インタビューを行った。また，合わせて展示会自体について，イベントなどへの参与観察を行った。

(3) 調査成果

上記の調査は無事に完了し，一定の人数の聞き取りや現場での観察データを得ることができた。本プロジェクトと関係する方法論的課題を含んだ記述は，本誌『都市文化研究』13号の「海外レポート」として掲載された。また，本プロジェクトをその一部として含む理論的枠組を示した論文は，2013年3月に『社会学評論』（252号，日本社会学会発行）に掲載の論文「ポピュラーカルチャーにおけるモノ ―― 記号・物質・記憶」として公表された。さらに，本プロジェクトの主要な対象であった模型というモノに照準し，その歴史を系譜学的に明らかにした成果を，2013年10月の第86回日本社会学会大会（慶應義塾大学）において報告した。

3. 佐々木洋子「心身の不調への対処行動の実態解明に向けた調査研究」

本プロジェクトは，人びとの心身の不調への対処行動（医療社会学では「病気行動」）の実態解明を目指す共同研究プロジェクト「病気関連行動（Illness Behavior）研究」（共同研究者：株式会社応用社会心理学研究所，工藤直志（金沢大学 人間社会研究域 研究員））の一環である。共同研究プロジェクトでは，一般の人を対象とした「不調時の対処行動にかんする調査」（インターネットモニター調査，2010年度）と基礎的なデータ分析をすでにおこなっており，2012年度ドクター研究員プロジェクトでは，詳細なデータ分析に基づく病気関連行動のモデル化と研究成果の公表を目的としている。報告書作成と結果の公開に向け，データ分析と分析結果の検討を主目的とした合同研究会を定期的に開催した。

(1) 研究会

2013年3月までに計10回の研究会を開催した。研究会は，応用心理学研究所内でおこなわれた。出席者は，いずれの研究会も，工藤直志（金沢大学），八木秀泰（応用社会心理学研究所），岩林明美（応用社会心理学研究所），古谷文男（応用社会心理学研究所），佐々木洋子（UCRCドクター研究員）と他1〜2名（応用社会心理学研究所）であり，内容は以下の通りである。①2012年4月13日：報告書作成のための体制とスケジュール確認，分析結果についての議論，②5月28日：報告書で主として取り扱う内容と章構成案，分析結果についての議論，③6月20日：報告書の章構成および執筆担当者の確定，分析結果についての議論，④7月19日：掲載する図表の確定を含めた執筆内容の確認，報告書の配布部数やHPの掲載についての検討。また，今後の調査に向けての議論，⑤8月7日：報告書の執筆内容についての報告と検討，残りのデータについての議論，⑥9月7日：報告書の執筆内容についての報告と検討およびデータについての議論，今後の調査企画にかかわる近年のインターネットリサーチ事情や日本における社会調査の回収率，調査会社の利用といった社会調査についての議論，⑦10月17日：執筆内容についての報告・検討およびデータについて議論と今後のスケジュールの確認，⑧11月21日：報告書の執筆内容についての検討と関連事項の確認，⑨12月26日：報告書の執筆内容の確認，「病気関連行動」に関する行動要因についての新たな分析結果

についての議論，⑩2013 年 3 月 1 日：報告書の執筆内容の確認および校正。

(2) 成果の公表

これらの研究成果は，一部が応用社会心理学研究所の HP（http://www.aspect-net.co.jp/servset_04_6.htm）と Facebook（「病気関連行動研究会」）で公開されている。また，報告書（近刊）も公開・配布予定である。2013 年度以降には，学会報告や学術誌への投稿が予定されている。

(3) 今後の課題と研究プロジェクトの展開

本プロジェクトでは，病気関連行動のモデル化を目指し，その一部は達成することができた。しかし，モデルの精緻化には，さらなるデータ収集が必要である。今後は「不調時の対処行動にかんする調査」の知見をもとに，大規模な調査をおこないたいと考えており，他機関との連携も視野に入れながらプロジェクトを進めている。

4. 木戸紗織「ルクセンブルク学研究会」

本プロジェクトでは，研究会を二度開催し，また論文集『ルクセンブルク学研究』(Studia Luxemburgensia) 第 3 巻を刊行した。

第 1 回研究会（参加者 15 名）

日　時：平成 24 年 7 月 28 日
場　所：立命館大学 大阪キャンパス
発表 1：高橋秀彰（関西大学）
「ルクセンブルクとスイスにおける言語政策の対照研究―ドイツ語圏の半中心地でのアイデンティティ構築について」
発表 2：西出佳代（北海道大学大学院）
「音響音声学的アプローチによるルクセンブルク語の母音の分析」

言語政策に関するルクセンブルクとスイスの比較研究（高橋）は，方言と母語の間で揺れ動くアイデンティティに着目した発表である。音声学の視点からルクセンブルク語の分析を試みた発表（西出）では，発表者が現地で録音したネイティブ・スピーカーの音声データをもとに，ルクセンブルク語の母音の実態解明が試みられている。

第 2 回研究会（参加者 10 名）

日　時：平成 24 年 11 月 17 日
場　所：立命館大学 東京キャンパス
発表 1：小川敦（一橋大学特別研究員）
「ルクセンブルクにおけるドイツ語の位置づけ―公用語の視点から―」
発表 2：田村建一（愛知教育大学）
「ルクセンブルク語とドイツ語の知識内容を表す間接話法　―接続法使用の条件―」
特別講話：岸本雄次郎（立命館大学，元ルクセンブルク住友信託銀行副社長）
「90 年代後半ルクセンブルク駐在雑感」

公用語としてのドイツ語に着目した発表（小川）は，三言語併用の中で言及されることの少ないドイツ語の役割を改めて検証しようとするものであり，言語学的な視点からルクセンブルク語とドイツ語の比較を行った発表（田村）では，ドイツ語とそこから派生したルクセンブルク語の共通点や相違点が示された。両発表は，論文集『ルクセンブルク学研究』第 3 巻に論文として収録されている。続いて，元ルクセンブルク住友信託銀行副社長で現立命館大学教授の岸本雄次郎氏による講演が行われ，駐在員としての体験やヨーロッパの金融システムに関するお話があった。ルクセンブルクはヨーロッパ有数の金融の中心地だが，その詳細について専門的立場から具体例とともにお話しいただいたことで，小国でありながらヨーロッパ経済に対するルクセンブルクの影響力がいかに大きいかを再認識した。

なお，この研究会は東京で開催された。関西以外での開催は初めてであったが，東京近辺を中心に新潟からも参加があり，また院生も多かったことから，ネットワーク拡大のため今後も京阪神以外での研究会開催を検討していくこととなった。

論文集『ルクセンブルク学研究』第 3 巻（2012 年 12 月 25 日刊行）

今号には，以下の論文 3 編が収録されている。

- Tamura, Kenichi: Der Konjunktiv des Luxemburgischen in der indirekten Rede uber den Inhalt des Wissens. S. 1-22.
- 木戸紗織「ルクセンブルク語訳新約聖書の受容　―司祭アンケートをもとに―」，23-44 頁。
- 小川敦「ルクセンブルクにおける公用語としてのドイツ語　―地方自治体で広報誌での使用を参考に―」，45-62 頁。

本論文集は，国内およびルクセンブルクの大学・研究機関に送付されている。ルクセンブルクに関する研究成果を広く公開する場として，新たな執筆者を募りつつ，今後も継続して刊行する予定である。

5. 石川優「ポピュラーカルチャー研究の領域横断的な方法論の検討―「やおい/ボーイズラブ」を対象に―」

(1) プロジェクトの目的

現在，男性間の恋愛を主題とした女性向けの作品群である「やおい/ボーイズラブ（BL)」に対する学術的関

心が高まっている。しかし，様々な分野でやおい/BL研究が活発におこなわれる一方で，それらの研究と既存の学問制度 —— 方法論やディシプリン —— との関係は充分に整理されていない。そこで本プロジェクトでは，やおい/BL に対してどのような方法論が可能であり，それがどのようなディシプリンに位置づけられるのかを解きほぐすことを目的とする。この試みを通じて，特定の文化事象やディシプリンを超えた，ポピュラーカルチャー研究全体に敷衍可能な領域横断的な方法論の可能性を模索することを最終的な狙いとする。

(2) 運営の体制

プロジェクトの主軸は，年 1 回のシンポジウムの開催とそれに向けた定例研究会の実施である。指導教員である三上雅子教授（文学研究科），研究協力者である東園子（大阪大学），木下衆（京都大学），西原麻里（同志社大学），秦美香子（花園大学）がプロジェクトの運営にあたった（以上五十音順，所属は 2012 年度当時）。また上記に加え，京阪神圏の若手研究者を中心に組織される「大阪腐女子研究会」のメンバーも運営に携わった。研究代表者と研究協力者を含む同研究会は，2010 年以降シンポジウムを継続して開催しており，本プロジェクトはその成果に一部基づいている。

(3) 活動の実績

2012 年度は，研究会を計 7 回実施した。第 1 回として本プロジェクト始動に向けたキックオフミーティングをおこない（2012 年 4 月 20 日），第 2〜6 回ではシンポジウム開催に向けて綿密な話し合いを重ねた（6 月 8 日，7 月 2 日，8 月 9 日，8 月 13 日，8 月 30 日）。また，シンポジウム終了後にプロジェクトの総括と今後の課題について討議し（12 月 18 日），メーリングリストを通じてさらに議論を深めた（〜2013 年 3 月）。

シンポジウム「やおい/BL を研究する —— 方法論とディシプリン ——」は，以下の要領で実施した。日時：2012 年 9 月 9 日（日）14 時〜17 時，天神橋アートセントー，司会：木下衆，登壇者：東園子，西原麻里，石川優，杉本＝バウエンス・ジェシカ（京都精華大学）（以上登壇順，研究代表者と研究協力者の所属は省略），主催：大阪市立大学都市文化研究センター，共催：大阪腐女子研究会，協力：大阪市立大学都市研究プラザ，京都社会調査研究会，参加者：35 名。

(4) 得られた成果と公表

シンポジウムでの討議から，ディシプリンによってやおい/BL の調査・分析に多様なアプローチがあること，それらのアプローチにはディシプリンの差異を超えた方法論的な共通点があることなどが確認された。また，当初の問題設定である「やおい/BL をいかに研究するのか」という点だけでなく，「学生をいかに教育するのか」，「やおい/BL の実践者（実作者，編集者，ファンなど）の声をいかに汲み取るのか」といった課題も新たに浮上した。こうした論点は，ポピュラーカルチャー研究全体で共有可能であると考えられる。大衆的な文化の研究と教育について領域横断的に追究した本プロジェクトの成果は，ポピュラーカルチャー研究の発展に寄与するものとなるだろう。本プロジェクトの成果の一部は，本号に掲載されているシンポジウム報告において公表している。得られた成果と今後の展望については，そちらを参照されたい。

2013 年度ドクター研究員 プロジェクト中間報告

1. 桑島穏「1950 年代ガーナのアシャンティ州における中高等教育と首長制社会」

(1) プロジェクトの目的

本プロジェクトの目的は，1950 年代のガーナ・アシャンティ州における社会権力たる首長（首長制）の特質とその変容を，中高等教育との関わりから解明することにある。ガーナにとって 1950 年代は脱植民地化（独立）を経験した激動の時代であるが，近年の研究では，当時の地域社会における政治文化が研究されている。1950 年代の同州においては首長層と「若者層」との相克と同時に階層や職業・地位における両者の重複が明らかにされ，そのような社会の流動性を促進した要因として学校教育一般が指摘されている。本プロジェクトでは，中高等教育がどのように地域社会の流動性を促進するに至ったのか，その具体的な様相を議会議事録，州知事報告書，そして地方新聞の記事を基に考察している。

(2) プロジェクトの進捗状況

まず，すでに入手していた議会議事録の一部，そして地方新聞の記事を分析することから本研究を開始した。1940 年代の末にアシャンティ州初の公立中等学校が開校し中等学校の運営に首長・王が参画するなど，（とくにクマシにおける）首長と王が中等教育に強い関心を抱いていたのは明らかである。50 年代以降は，中等学校が急増し，さらに同州初の大学として科学技術大学 University of Science and Technology がクマシに設立された。当時の地方新聞は，これらの新しい学校教育の動きに対して首長・王が関心を示し，特にアサンテヘネ（アシャンティの王）が頻繁に学校を視察していたこと，

そして彼の意向が中等教育の内容に少なからず影響を及ぼしていたことを，報じている。

1950 年代のアシャンティ州に関する先行研究では，伝統文化として首長制に関心が集中してきたが，近年では「若者層」に注目が集まり，「若者層」の主体性と戦略が評価されている。それに対して本プロジェクトでは，中高等教育から当該時期アシャンティ州の政治社会を見ることで，従来の研究とは異なる社会像を提示しようと試みている。当時のアシャンティ州では，様々な既存勢力が存続危機を認識していた。その中で中高等教育は政治・職業・経済など様々な分野で「（新規）ステータス」として認知されたゆえに，それを修めた（あるいは一瞬でも経験した）者を様々な陣営が取り込もうとした。1950 年代のアシャンティ州においては，中高等教育の修了（経験）者こそ社会流動化の触媒となりえたのではないだろうか。

今後は，クマシの国立公文書館を訪問し（渡航準備を進めている），未入手の州知事報告書，首長評議会議事録，州視学官報告書，そして地方新聞アシャンティ・パイオニアの記事を収集し分析する予定である。可能であれば，当該時期に同州の中等学校と科学技術大学に在籍していた学生・教師に対して，インタビューおよびアンケートによる聞き取り調査も試みる。

(3) 成果の発表

本研究の内容の一部は，2013 年 5 月の日本西洋史学会第 63 回大会（京都大学）において「1940-50 年代の植民地アシャンティ（現ガーナ中部）におけるチーフと学校教育：中等学校プレンペ・カレッジの設置（1949 年）をめぐって」という題目で報告した。さらに，7 月 14 日のイギリス帝国史研究会例会（大阪大学）において東京大学・澤田望氏の報告（初期ナイジェリア新聞（1880-1920）における記念・顕彰行為の記録―カリスマから小さき者へ）に対するコメント報告を実施し，19 世紀から 20 世紀という広い視野で西アフリカ地域を比較考察する機会を得た。今後はこれまでの研究をさらに深め，現在加筆修正している修士論文（英文，英国・バーミンガム大学へ提出）において本プロジェクトの成果を公表する予定である。

2. 中嶋晋平「萬年社コレクションの資料を使った関西の広告史に関する調査研究」

(1) プロジェクト概要

本プロジェクトの目的は，近代日本を代表する広告代理店であった萬年社が所蔵した資料群（以下，萬年社コレクションと称す）を活用して，関西における広告史についての調査研究を推進することである。なお，本プロジェクトは，2008 年度から継続的に実施されている「萬年社コレクション調査研究プロジェクト」の一環である。

(2) 研究会

第 1 回「放送メディア広告の文化研究会」（6 月 26 日，大阪市立大学文学部棟 251 教室，参加者 10 名）
テーマ：「食品 CM の日常／非日常　―日清食品とハウス食品という二大在阪企業を中心に―」

大阪市立大学に所蔵される萬年社コレクションは，大量の社史や制作資料，ポスターを含む紙史料のほか，テレビおよびラジオの CM を多く含んでいる。これらのうち，テレビ／ラジオ CM の史料を用いて，研究の可能性を考えるために本研究会は企画された。

同時に，メディア資料のアーカイブ化がもたらす現代的な視聴経験は，単純な「当時性」の再現に留まらないメディア史的観点を有することを念頭に置いた。ここから，本コレクションの特色に沿って資料を抽出し，普段のテレビ／ラジオ視聴経験のあり方では実現し得ない，まとまった数の視聴を行いながら，参加者とともに研究テーマについて探る試みを行った。

第 1 回では，本コレクションの所蔵広告史料のうち，最大数のクライアントである日清食品と，メディア出稿自体の数が非常に多いと考えられるハウス食品の 2 社をテーマとした。このことで，以下の点について意義を見出すことができる。1 点目に，食品という身近なテーマとそのテーマを取り扱う社会的イメージとしての広告を対象にすることで，これまでのメディア・広告研究の大きな課題であった素朴な日常との関わりを考察できる点，2 点目に，この視点を実現するようなデータベース・アーカイブのあり方を考えられる点，3 点目に，東京中心になりがちなメディアの研究において，関西のまとまった数の史料を含む本コレクションの優れた特色をどのように活かすかという点の 3 つである。

具体的には，カレー（ルー）と，インスタントラーメンという，日本の高度成長期を代表する食品二つを選定した。特色としては，まず簡便さや手軽さの訴求と，「手作り」「家庭的」の訴求が同時に行われているケースが多々見られた。当該商品の普及率の推移や，消費量などの統計と比較して，カレーとラーメンでは，「食卓における象徴的意味合い」を異なる形で発展させてきたことがわかる。

参加者からは，特にカレーに関して，商品ごとに付されたマーケティング的イメージとテレビ CM の傾向が一致する点が指摘された。このことから，より実際に迫る研究のためには，商品自体の持っていた社会的イメージの研究を並行して行うべきだという意見があり，データベース・アーカイブを用いた研究の一つの視点も示された。

(3) 調査（実施期間：7-9 月，場所：大阪市立大学経済研究所棟 429 教室）

萬年社コレクションには 600 点を超える内部資料が残されており，資料の整理・データベース化を目的として，全資料について写真撮影を行った。

(4) 終了までの今後の課題

萬年社コレクションには，広告史研究上における貴重な映像資料が数多く保存されている。これらを活用しその成果報告を行うことを目的として，第 1 回に引き続き，一般参加者を交えての研究会を予定している。

また撮影データについては，他の資料群と同様の形式を備えたデータベース化を予定している。同時に，これまで行ってきた内部資料の整理から，戦前・戦後を通じた日本の広告代理店のさまざまな活動内容が次第に明らかになってきた。今後は戦前期における国家と広告代理店との関係を中心に，近代日本社会における広告代理店の社会的役割について研究を進めていく。

3. 小牧龍太「新しいモビリティとモビリティ論の時代のメディア研究と映像社会学」

本プロジェクトではデジタルメディア・モバイルメディア・エスニックメディア研究と Mimi Sheller らが唱える「新しいモビリティ論のパラダイム」との接点を探ることを目的とし，研究会の開催，学会・ワークショップ等への継続的な参加を軸とした活動を行っている。プロジェクトの構成メンバーは以下の通りである。

研究代表者：小牧龍太

研究協力者：ケイン樹里安（文学研究科社会学専修前期博士課程 2 年），李天能（文学研究科社会学専修前期博士課程 2 年）

指導教員：石田佐恵子

研究会

「『越境する文化』のメディア研究会」と題した研究会を 2013 年 9 月末までに 3 回開催した。

- 第 1 回　2013 年 5 月 24 日 大阪市立大学文学部棟 251 教室　参加者：伊地知紀子，石田佐恵子，ケイン樹里安，李天能，小牧龍太，他 3 名　報告（小牧龍太「“Insufficient Privileges” ―在日日系ブラジル人とデジタルメディア・モバイルメディア」）およびディスカッション
- 第 2 回　2013 年 7 月 3 日 大阪市立大学文学部棟情報編集室カフェコーナー　参加者：笹島秀晃，松井広志（UCRC 研究員），ケイン樹里安，李天能，小牧龍太，他 6 名　報告 1（ケイン樹里安「『複数のルーツを持つ人々』の SNS を介した関係性」），報告 2（李天能「『ネット文化』の歴史と現在 ―越境するネット文化と境界としてのインターネット―」）およびディスカッション
- 第 3 回　2013 年 8 月 2 日　大阪市立大学学術情報総合センターグループ研究室 A 号室　参加者：坂﨑基彦（国立ソウル大学校社会科学大学言論情報学科博士課程修了研究生），山中千恵（仁愛大学），石田佐恵子，ケイン樹里安，李天能，他 4 名　報告（坂﨑基彦「草創期におけるインターネット普及の日韓比較―標準化・現地言語化を中心に―」）およびディスカッション

学会・ワークショップ等参加

- Differential Mobilities - Movement and Mediation in Networked Societies　2013 年 5 月 8 日～11 日 Concordia University（カナダ）　研究代表者が参加し，研究成果の口頭発表を行った。また学会期間中に開催されたモビリティ論に根ざした研究手法をテーマとしたワークショップに参加し，国際的なモビリティ論研究の実践者と研究交流を行った。
- カルチュラル・タイフーン 2013　2013 年 7 月 13～14 日　東京経済大学　研究代表者が参加し，研究成果の口頭発表を行った。また日本の移民研究者，メディア研究者と研究交流を行った。
- Reframing the Global Conference/Reframing Area Studies Doctoral Student Seminar: An East Asian & Pan-Asian Perspective　2013 年 9 月 26 日～28 日 Indiana University-Bloomington（米国）研究代表者が参加して研究成果を基にした論文を報告し，教員メンター（イリノイ大学・インディアナ大学の教員）および他の参加者（イリノイ大学・インディアナ大学の大学院生）から成果・論文内容に関するフィードバックを得た。

今後の課題・成果の発表

今後は上述の研究会，学会・ワークショップ参加，研究交流を通じて得た助言や提案を各メンバーがそれぞれの研究に反映させ，学術誌・国際学会等で発表できる成果物に仕上げていくことを目標とする。研究代表者は 2014 年 3 月に米国フィラデルフィアで開催される Association for Asian Studies（アジア研究学会）年次総会で研究成果の発表を行う予定である。

4. 木戸紗織「ルクセンブルク学研究会」

本研究会では，ヨーロッパの要衝であり緩衝地帯でもあるルクセンブルクについて，言語学，社会学，教育学，法学，経済学等の様々な立場から研究を行っている。主な活動は，研究発表会の開催と機関紙『ルクセンブルク学研究』の発行であり，今年度は，二度の研究会および機関紙第 4 号の刊行を予定している。なお，本研究会は

2007 年度より活動しており，機関紙最新号にはこれまでの活動の詳細が収録される予定である。

第 1 回研究会（参加者 10 名）

日　時：2013 年 7 月 27 日（土）
場　所：立命館大学朱雀キャンパス
発表 1：中村依莉子（一橋大学大学院修士課程）
「ルクセンブルクにおける 1843 年教育法改正とフランス語」
発表 2：木戸紗織（UCRC ドクター研究員）
「多言語社会における言語選択と領域（domain）の関係―ルクセンブルクの教会を事例として―」
発表 3：田村建一（愛知教育大学　教授）
「スル型表現とナル型表現―英語，ドイツ語，フランス語，ルクセンブルク語の対照―」

第一の発表（中村）は，現在の言語使用の枠組みを築いたとされる 1843 年の初等教育法改正をめぐる議論を通して，ルクセンブルクの多言語社会の成立過程を明らかにしようとしたものである。発表者は，唯一のロマンス語であるフランス語が多言語社会の形成に何らかの役割を果たしたのではないかと考えており，本格的なフランス語学習の導入が議論された 1843 年の初等教育法改正に注目している。発表者は本テーマについて修士論文を執筆予定であることから，質疑応答では，論文の構成が検討されたり資料に関する情報が提供されたりと，会場から多くの発言があった。

続く第二の発表（木戸）は，本年 3 月に大阪市立大学に提出された博士論文をもととした発表である。発表者が行った調査によって，ルクセンブルクの教会では礼拝に複数の言語が使用されることが明らかとなり，それらの言語がどのような基準で選択されるのかを司祭に対するアンケートに基づいて分析している。本発表でも，フランス語の使用について特殊なケースがあることが報告され，先の発表と関連して，ルクセンブルクの三言語併用におけるフランス語の特異性が浮き彫りとなった。

最後の発表（田村）では，英語，ドイツ語，フランス語，ルクセンブルク語でどの程度スル型表現（人間が活動したり認識したりする形の表現）が用いられるかという調査を通して，ルクセンブルク語の特徴を明らかにすることが試みられた。ルクセンブルク語訳された文学作品が少ないため，今後さらなる用例の収集・分析が必要だが，ルクセンブルク語の口語性／文語性といった問題や，ルクセンブルク語とその周辺の諸方言との比較など，かねてから本研究会でも議論されているいくつかのテーマとの関連性が示唆された。

第 2 回発表会

日　時：2013 年 11 月下旬（予定）
場　所：立命館大学大阪キャンパス，またはキャンパスプラザ京都

成果報告

本プロジェクトによって得られた成果は，論文集『ルクセンブルク学研究』（Studia Luxemburgensia）において公開される。12 月刊行予定の第 4 号には，論文 2 編，博士論文報告 1 編，書評 1 編，研究会報告が収録される予定である。本論文集は，研究成果を広く世に公開するとともに，国内外の研究者との交流を促進する目的から，国内およびルクセンブルクの研究機関に配布される。

5. 石川優「ポピュラー文化研究における実践と研究の架橋　―「やおい/ボーイズラブ」を対象として―」

(1) プロジェクトの目的

男性間の恋愛を主題とした女性向けの作品群である「やおい/BL（ボーイズラブ）」は，多様な実践者（実作者，編集者，ファンなど）が関わることによって拡大してきた。しかし，一部のやおい/BL 研究はこうした実践（者）の声を等閑視しているとして，しばしば批判されている。そこで本プロジェクトは，やおい/BL における実践と研究というふたつの視点をつなぐことを目的としている。やおい/BL をつうじて，ポピュラー文化研究における実践という視点の重要性を確認し，実践と研究の双方の視点をつなぐことでポピュラー文化研究の活性化を目指していく。

(2) 運営の体制と実績

本プロジェクトの運営は，三上雅子教授（文学研究科）の指導のもと，研究代表者と研究協力者が共同でおこなう。研究協力者は，東園子（大阪大学），木下衆（京都大学），杉本＝バウエンス・ジェシカ（京都精華大学），西原麻里（関西大学），秦美香子（花園大学）である（以上五十音順）。上記メンバーを中心として，月 1 回の定例研究会と年 1 回のシンポジウムを実施する。2013 年 10 月までに計 5 回の研究会を実施しており（4 月 29 日，6 月 2 日，7 月 15 日，8 月 25 日，10 月 6 日），シンポジウムに向けて綿密な議論をおこなっている。

(3) 今後の活動予定

2013 年 12 月 15 日（日）にシンポジウム「BL のカラダ ―― マンガ表現にみる男性身体」を開催する。これまでにプロジェクトメンバーが開催してきたシンポジウムにおいて，「やおい/BL に描かれた身体を読者はどのように受容するのか」，「描かれた身体を研究者はどのように分析するのか」が争点のひとつとなってきたことを

踏まえ，本年度は「身体を描くことに対する実作者の視点」を主なテーマとしている。このシンポジウムでは，やおい/BL 文化を牽引する「商業 BL マンガ」を対象とし，BL マンガ家，やおい/BL 研究者，隣接分野の研究者などの実作者と研究者の多様な視点を交差させ，やおい/BL 表現における身体について議論する。また，シンポジウムから得られた成果と課題について，研究会で議論を深めていく予定である。

(4) 成果の公表予定

まず，2012 年度ならびに 2013 年度の都市文化研究センター D 研究員プロジェクトの成果をまとめた報告書の発行を目指す。この報告書を教育・研究機関，研究者，実作者（小説家・マンガ家）などに配布し，一連のプロジェクトの研究成果を外部に発信する。次に，その内容の一部をウェブサイト（2013 年度公開予定）に掲載し，プロジェクトの成果の周知につとめる。一連のプロジェクトで得られた成果を広く発信することで，やおい/BL 研究の活性化を促していきたい。

6. 柴台弘毅「その歌声は誰のものか ―“VocaListener”を用いた歌唱表現に関する研究」

「VocaListener」とは，独立行政法人産業技術総合研究所によって開発された，録音された人間の歌声からその歌い方を真似て，歌声を合成できる技術である。この技術は「初音ミク」などで知られる音声合成ソフト「VOCALOID」に組み込むプラグインとして 2012 年に商品化された。本プロジェクトは，この「VocaListener」を事例に，音声合成ソフトと人間の声・身体・歌唱表現の関係を理論化することを目的として行われる，岡田正樹（UCRC ドクター研究員），鍾允順（関西大学）との共同研究プロジェクトである。本プロジェクトは，小川博司（関西大学教授）主催「『声』の諸問題を研究するプロジェクト」の一環としてスタートし，同プロジェクトと連携しながら研究を進めている。

本プロジェクトは，毎月開催される定例研究会で，音楽研究，都市文化研究，インターネット理論研究の 3 つの視点から議論を深め，関連領域研究の整理と理論フレーム構築を目指し，最終的な研究成果を広く公開することを予定している。また，定例研究会と並行して，実際に音楽シーンで活躍するヴォーカリストと共に「VOCALOID」および「VocaListener」を使用した音楽制作実験を行うことで，音楽表現者の視点を学際的な議論に取り入れていることは，本プロジェクトの大きな特徴である。

現在までに 4 回の定例研究会を開催し，2 回の実験を実施している。定例研究会は毎月，関西大学尚文館で開催されており，参加者は，柴台弘毅（UCRC ドクター研究員），岡田正樹（UCRC ドクター研究員），鍾允順（関西大学）である。実験の参加者は，柴台弘毅（UCRC ドクター研究員）と大沼拓也（ヴォーカリスト）であり，実験は柴台自宅で実施されている。研究成果の一部は，2014 年 3 月に刊行される『人間科学』80 号（関西大学大学院社会学研究科院生協議会）で研究ノートとして報告を予定しているほか，2013 年度末に大阪市立大学にてゲストを招いた公開形式の研究会を開催し報告する予定である。また，これらをもとに，プロジェクト全体をさらに発展させ，次年度以降に最終的な研究成果を報告するための準備を進めている。

【定例研究会】

2013 年 6 月 20 日には，研究体制や今後のスケジュール確認，文献の選定についての議論を行った。7 月 25 日には遠藤薫（著），2013「廃墟で歌う天使―ベンヤミン『複製技術時代の芸術作品』を読み直す」（現代書館）についての読書会を開催し，議論を深めた。8 月 25 日には高木祐（編），2010「＜声＞とテクストの射程」（知泉書館）についての読書会を開催し，議論を深めた。9 月 26 日には，前回までの議論を踏まえ，参加者 3 名が各自の専門領域から問題提起を行い，議論を深めた。また，研究ノート執筆内容についてのフレーム構築や分担についての議論を行った。

【実験】

2013 年 5 月 15 日には，実験のための器材調整と制作楽曲の選定，今後のスケジュール確認についての議論を行った。7 月 12 日には，ヴォーカルトラックのレコーディングを行い，定例研究会における議論内容についてのインタビュー調査を行った。